

『私』を探し求める団塊世代の女性達

## 団塊世代の女性、「私達」の履歴書

### 研究体制

- 企画推進 : 高津伸司 (株)読売広告社マーケティング局 局長  
(財)ハイライフ研究所 主任研究員  
遠藤敏明 (株)読売広告社マーケティング局  
(財)ハイライフ研究所 研究員
- 研究協力 : (株)マーケット・プレイス・オフィス  
コミュニケーション デザイン インスティテュート(株)
- 事務局 : (財)ハイライフ研究所 小坂井達也、高木麻紀子

## はじめに

ここ数年、あらためて「団塊の世代」が注目を集めている。今年（2001年）、全員が50歳をこえる「団塊の世代」は、いままでの謙虚で控えめなシルバー層と異なり、あらゆる面にポジティブなニューシルバー層として、低迷するわが国消費の牽引役を期待されている。加えて当該する「団塊の世代層」のみならず前後の世代にあたえる影響や、「団塊の世代の子供世代」、いわゆる「団塊ジュニア世代」との関連までとらえてみると、その影響力の大きさは計り知れない。

一方、現在わが国は、明治維新、第2次大戦後とならぶ、経済・社会の大変革期の真っ只中にある。まったなしの「少子・高齢化」「国際化」「IT革命」の中で、団塊世代も人生設計の再構築を余儀なくされている。その点でも「団塊世代の行方」が大きな関心を集めているといえよう。

彼らのこれからのライフスタイルは、後に続く世代のライフスタイルに大きな影響を与えるからである。

当ハイレイフ研究所では、これら「団塊の世代」のライフスタイルに着目し、継続テーマとして研究している。平成11年には読売広告社と共著で「団塊家族」を出版した。団塊世代と団塊ジュニア世代、そして団塊世代の孫にあたる「団塊グランド・チャイルド」を「団塊家族」としてとらえ、それぞれの世代の消費行動とライフスタイルの基になる、世代の価値観や気分の相関性を解き明かしたものである。更には「団塊の世代」の実態と構造を多角度から把握すべく調査・分析を行った。その結果、「分化する（分化せざるを得ない）団塊」の実像をみることができ、調査レポート『「ネオ 50's」世代の研究～「団塊」が壊れ、バラバラに分散・分化する中高年世代～』として発表した。

そして、今年度は「団塊世代の女性達」を取り上げる。「拡大の時代」や「戦いの時代」は、いわば男が表舞台にたつ時代である。そういう意味でいえば、「団塊の世代」が走り抜けてきた時代は、「男」が表だっていた時代だった、ともいえよう。多くの団塊世代論は男性を中心に論じられたものである。

しかし、私達が「団塊家族」でみてきたように、「団塊女性達の価値観や気分」が、団塊男性達のみならず団塊ジュニア、その前後の世代に対しても大きな影響力をもっているのは自明の理である。

「新しい主婦・母親」を時代時代に生み出してきた団塊女性達の実態と歩んできた道を各種データをもとに『団塊世代の女性、「私達」の履歴書』としてまとめることから始めた。

かつて表舞台に出ることのすくなかった団塊女性達ではあったが、新しい時代を迎えたわが国の「ライフスタイル創造」の鍵を握る“おおきな塊”として、まさに主役ともいえるのである。

## 団塊世代の女性 / 研究レポート

### 目次 (ページ)

研究の目的	p.3	
研究の問題意識と方法	p.4	
プレヒストリー	p.8	
ステップ	15歳の転機・選択(中学卒業期) 昭和37年(1962)～昭和41年(1966)	p.9
	中卒就職は貴重な労働力として経済成長に貢献、高校進学には受験競争が	
ステップ	18歳の転機・選択(高校卒業期) 昭和40年(1965)～昭和46年(1971)	p.15
	高卒就職で社会人・OLに、そして自由恋愛と結婚準備に励む	
ステップ	24歳の転機・選択(結婚/出産期) 昭和46年(1971)～昭和50年(1975)	p.20
	自由恋愛結婚か見合い結婚か、そして憧れの専業主婦・出産へ	
ステップ	35歳の転機・選択(育児・教育期) 昭和57年(1982)～昭和61年(1986)	p.24
	子供の有無、自由時間利用、子供の教育、再就職	
ステップ	50歳の転機・選択(中高年期) 平成4年(1992)～現在	p.28
	家庭/家族からの解放、仕事か自立か介護か	
まとめ1	『大きな塊』から『個性的なライフスタイル』を持つに到った団塊世代の女性達	p.31
	1. ライフステージごとに、分裂しつづけた「大きな塊」	
	2. 『仕事をする』中高年の団塊世代の女性達、3つのグループに区分される	
	3. 若い時の「転機における行動選択」で、5タイプのライフスタイルにグルーピングされる	
まとめ2	「私たちの履歴書」から浮き上がってきた団塊の女性達キーワード	p.34
参考資料1	団塊の世代が育った時代年表	p.37
参考資料2	データ編	p.40
付表	総括チャート図(3枚)	
	総括チャート図その1 - :「団塊世代の「女性たち」555万人の転機/選択」	
	総括チャート図その1 - :「団塊世代の「女性たち」555万人の転機/選択」	
	総括チャート図その2 :「団塊女性 555万人の行方とその成長ステップ・プロセス」	

研究の目的

激変した戦後の日本、  
『私』を探し求めた団塊世代の女性達。  
そして、今も……。

「昭和 22 年～昭和 26 年」に出生した団塊の世代の人口は、男女合わせて 1 千 110 万人（平成 11 年現在・国勢調査推計人口）いるが、前後の世代に比べてはるかに数の多い「人口の塊」である。その大きな塊が時代を通過する時期、これにあわせて様々な需要が生まれ、供給が創られ、技術も開発され、様々な商品が社会に拡まった。

団塊の世代が 10 代後半になった時に、「ハイティーン」が、そしてその後、世代の成長とともに「ヤング」「ニューファミリー」「金妻」「熟年世代」「中高年リストラ」など、次々と流行語が生まれている。この大きな塊は、各時代の経済成長や価値観に大きな影響と脅威を与えた。その影響力や脅威についての研究や評論は、どちらかという、男性中心の団塊世代論に大きく偏っている。本研究では、団塊世代のボリュームの約半数を超える「女性約 555 万人」の存在に焦点を当てている。

団塊世代の女性達は、10 代にミニスカートを身につけることで「衣料品」を「ファッション」に、中卒、高卒時においては高経済成長社会の新規労働力として採用され、会社の古臭い「事務所」を「オフィス」と化した。さらに、結婚適齢期には、「自由恋愛」と「恋愛結婚」に飛び付き、30 歳を前にして「夢見る専業主婦」の地位を獲得し、今までに見られなかった「新しい主婦・母親」を演じている。そこでは、合理的で自由な生活を可能とする家電や自動車など耐久消費財の飛躍的な普及をもたらし、家電業界、自動車業界の業績向上に大きく貢献している。

そして、この団塊世代の女性の成長過程で、日本は古来の大家族制が急速に消滅し、都市近郊の核家族が日本の主流となる。

男性上位の社会で、女性が生きてゆくには、男性より大きな抵抗があったに違いない。その抵抗を押しつけてきたからこそ、封建的なものを持つ日本の社会が大きく変わったといえる。

戦後の日本の社会を変えたのは、大きな「人口の塊」だけではなく、又、男性だけではない。そのキーマンは「団塊世代の女性達」だったのである。

.....

本レポートは、団塊世代の女性たちがどのようなプロセスを経て今日に到ったのか、また、変化する時代にどのように対処し、どのように生きてゆく機会を見つけ、選択をしてきたのかを追う。今、50 代を迎え、中高年世代となった団塊世代の女性達は、「家族との距離」「社会との距離」を見詰める中、どのような『私』を見つけようとしているのか。

団塊の世代の女性達は、「その数の多さの故に」というプレッシャーを背景にしつつも、新しい需要を創り、新しい供給を育て、やがて自らの手で『新しい何か』を生み出している。

その何かとは、常に「新しい女性の生き方」である。

本レポートは、『私』を探しつづけた、団塊世代の女性達の履歴書でもある。

## 研究の問題意識と方法

### 1 団塊世代の女性 / 現況

50歳台に達した団塊世代の女性(昭和22年～昭和26年出生)は、現在、約555万人(平成11年「48歳～52歳」の年齢人口)いるが、社会的属性において、どんな立場にいるかを整理しておこう。

配偶関係からみた区分け(「平成7年の国勢調査」、年齢45歳～49歳に対応)

有配偶	85.0%	472万人
未婚	5.6%	31万人
離別	6.4%	36万人
死別	2.6%	14万人

就業状態からみた区分け(「平成9年就業構造調査」、年齢45歳～49歳に対応)

有業者	72.8%	404万人	仕事为主	43.6%	242万人
			家事为主	28.6%	159万人
			仕事も家事も	0.6%	3万人
無業者	27.2%	151万人	家事を主	25.7%	143万人
			家事以外	1.5%	8万人

団塊の女性世帯(家族類型別)での区分け(平成7年国勢調査)

総数	526万人	100.0%	
核家族	375	71.3	
その他の親族世帯	夫婦のみ	48	9.1
	夫婦と子供	279	53.0
	男親と子供	1	0.3
	女親と子供	47	8.9
その他の親族世帯	夫婦と両親	4	0.8
	夫婦と片親	9	1.7
	夫婦、子供と両親	28	5.3
	夫婦、子供と片親	59	11.2
	その他親族世帯	27	5.1
非親族世帯	1	0.2	
単独世帯	23	4.4	
再掲 / 三世代以上	102	19.4	

(平成7年国勢調査「45～49歳」女性の世帯類型)

最終学歴からみた区分け

小中学卒	17.8%
高校卒	60.7%
短大卒	15.2%
大学・学院卒	6.3%
計	100.0%

(「平成9年就業構造調査」)

運転免許保有有無区分

免許あり	70.7%
免許なし	29.3%

(「平成10年警察庁白書」  
『45～49歳女性』)

2 問題意識

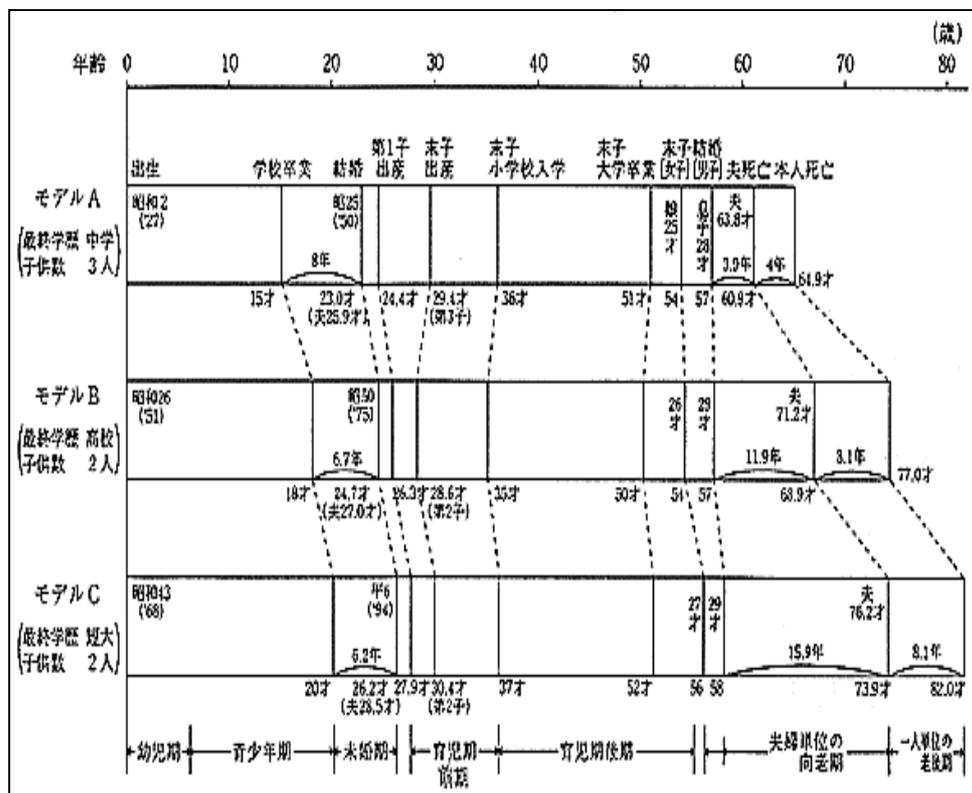
以上のように、団塊女性の現状は、細分化しても数十万人という単位で多様に区分されている。このように多様に区分される団塊の女性達は、どのようなプロセスを経てきたのか、具体的なデータと社会事象を組み込みながら、卒業、就職、結婚、出産、子育てなどのライフサイクルステージ（「女性のライフサイクルモデル・男女共同参画社会／総務庁」参考）ごとにその履歴を追う。

団塊世代の女性達の現実、夫の収入に支障をきたしたり、自分の職場を追われたり、子供が就職できなかったり、老人介護に追われたり、或いは自己実現のために教育や教養に励む人達など、多様な個人の生活をはじめている。多様に区分される団塊女性達はどのように誕生してきたのだろうか。

団塊世代の女性達の今の生活は、若い時の様々な経験（学歴、勤務経験、結婚形態、家族構成）が、大きく影響していることは間違いない。何故なら、その様々な経験が、20世紀の奇跡とまでいわれる高成長経済や革命的民主教育が実際に起こった時代の当事者であったからである。

出生から小学校、中学生まで、ほぼ「一つの大きな塊」であった団塊世代の女性たちは、「中学卒業／進学」からはじまって「高校卒業／進学」「結婚／出産／子育て」「中高年主婦」などライフステージが変わるたびに、バラバラに分解（「分解してもそれぞれの塊（人口規模）が大きいことが、その市場性において、大きな魅力でもある」）し続けた。そのことが、現在の中高年になった団塊の世代の多様な区分け、ライフスタイルを生み出しているのではないかと、という仮説のもとに、今回の研究はスタートしている。

女性のライフサイクルモデルの世代別比較（男女共同参画社会／総務庁）



厚生省「人口動態統計」「簡易生命表」「出産動向基本調査」、文部省「学校基本調査」

### ③ ライフステージ・ステップ

団塊世代の女性達のライフステージを、総務庁の『ライフスタイルモデル』を参考にし、団塊を分解する『機会と選択時期』として、5段階のステップを設定した。

その5段階ステップ毎に、どのような時代にあったのか、どのような問題にぶつかり、どのように対処していったのかなど、塊が分解・分裂してゆく姿を追った。

#### ライフステージ・ステップ

ステップ 15歳の転機・選択（中学卒業期） 昭和37年（1962）～昭和41年（1966）

中卒就職は貴重な労働力として経済成長に貢献、高校進学には受験競争が

ステップ 18歳の転機・選択（高校卒業期） 昭和40年（1965）～昭和46年（1971）

高卒就職で社会人・OLに、そして自由恋愛と結婚準備に励む

ステップ 24歳の転機・選択（結婚から出産期） 昭和46年（1971）～昭和50年（1975）

自由恋愛結婚が見合い結婚か、そして憧れの専業主婦・出産へ

ステップ 35歳の転機・選択（育児子育て・教育期） 昭和57年（1982）～昭和61年（1986）

子供の有無、自由時間利用、子供の教育、再就職

ステップ 50歳の転機・選択（中高年期） 平成4年（1992）～現在

家庭／家族からの解放、仕事か自立か介護か

「私」を探し求める団塊世代の女性達

## 団塊世代の女性、「私達」の履歴書

### 団塊世代の女性達・プレヒストリー

戦後の日本は、戦時下の束縛から脱し、男女同権が叫ばれ、6・3・3制がスタートする。

その昭和22年に団塊の世代が誕生した。以降、朝鮮戦争の好況にも恵まれ、戦後10年を待たず経済は戦前水準を回復する。

昭和30年代は、日本が急激に豊かになっていく時代である。それは、各家庭に「モノ」が行き渡っていく時代であった。明るい電灯がともされた居間で家族そろってテレビを見る、新築の団地に入居する、マイカーを手に入れる、そういう物質的充足が目標となり、その充足が幸福感を満たす、ある意味で幸せな時代でもあった。

そんな中、小中学生として「団塊の世代の女性達」は育っている。急激な変化は、東京など都市部を中心に顕れ、都市生活の発展は都市に偏在し、地方との格差が明確になってゆくことになった。

	年代		社会	生活	流行
	1945	昭和20	終戦	戦災孤児	リンゴの歌
	46	21	憲法公布		
0歳	47	22	団塊の世代生まれる	6・3・3制、給食開始	東京ブギウギ
1歳	48	23			
2歳	49	24	湯川秀樹ノーベル賞		
3歳	50	25	朝鮮戦争		鉄腕アトム
4歳	51	26	日米安保調印		「羅生門」金獅子賞
5歳	52	27			
6歳	53	28		テレビ本放送	街頭テレビブーム
7歳	54	29			プロレスが人気
8歳	55	30	ガット正式加盟		「家庭画報」創刊
9歳	56	31	経済白書「もはや戦後ではない」		太陽族
10歳	57	32			「週刊女性」
11歳	58	33	東京タワー	三種の神器 / 団地族 / インスタント	フラフープ、「女性自身」創刊
12歳	59	34	皇太子御成婚	マイカー元年	「少年マガジン」 「少年サンデー」創刊
13歳	60	35	所得倍増計画 / 安保 / スモッグ	カラーテレビ放送	ダッコちゃん
14歳	61	36	中学校三年生	初宇宙飛行	交通戦争

団塊世代の女性達が中学校を卒業するのが

昭和37年(1962) / 15歳

団塊世代の女性の『私たちの履歴書』は、  
ここからはじまる

**ステップ 15歳の転機・選択（中学卒業期）**  
**中卒就職は貴重な労働力として経済成長に貢献、**  
**高校進学には受験競争が**  
**昭和37年（1962）～昭和41年（1966）**

**データ1** 中卒女子の就職率は約25%、毎年、平均25万人以上が貴重な労働力として投入された

団塊世代の女性が、中学校卒業後、即、就職する実数は、昭和37年には34.4万人、就職率は28.2%である。昭和40年へ向かって、就職者数は年々減りつづけ、昭和41年には20万人を切るが、それでも、就職率は、19.7%と約20%にもなる。

就職先は、男性同様60%以上が「製造業」であった。その製造業の中でも、「繊維工業」「織物衣服製造業」が約6割を占めている。当時の中学卒の女性就職者は、男性ともに、貴重な労働力として、日本の産業界になくしてはならない存在であった。それでも企業に採用された就職者はよいが、一方で企業に採用されなかったり、家業を手伝う中学卒業生(その他)も毎年約10万人いた。

団塊世代の女性「中学卒業後」の進路(旧文部省 各年「学校基本調査」)

	卒業者(人)	就職者数(人)	率(%)	進学者数(人)	その他(人)
昭和37年	1,219,253	343,914	28.2	770,797	104,542
昭和38年	1,189,454	310,011	26.1	780,578	98,865
昭和39年	1,155,549	270,885	23.4	773,959	110,705
昭和40年	1,045,362	226,133	21.6	715,279	103,950
昭和41年	953,192	187,780	19.7	673,833	91,579

業種別就職先(主な業種)構成比(%)

	昭和38年		昭和39年	
	男	女	男	女
合計	100	100	100	100
建設業	6.7	0.2	8.1	0.2
製造業	61.3	62.2	60.9	63.1
卸/小売業	7.5	9.3	7.2	8.8
金融保険業	0.0	0.2	0.1	0.2
サービス業	6.9	15.5	7.0	16.6
公務	0.2	0.5	0.2	0.4

製造業内訳(人数、構成) 昭和39年・例 (人、%)

	男		女	
	人数	構成(%)	人数	構成(%)
製造業計	197,256	100	189,940	100.0
繊維工業	8,229	4.2	83,372	43.9
衣服その他繊維	3,616	1.8	27,001	14.2
電気機械器具	26,145	13.3	23,483	12.4
金属製品	38,613	19.6	5,504	2.9
機械	27,381	13.9	4,098	2.2
食料品	11,511	5.8	13,069	6.9
小計	115,495	58.6	156,527	82.4

資料；旧文部省 各年「学校基本調査」

参考トピックス

昭和 38 年度『経済白書』

日本は完全雇用には達したが、労働力が不足

昭和 38 年度の「経済白書」(宮沢経企庁長官)では、「経済全体に労働力の不足がみられるようになり、長いこと失業問題に悩まされて来た日本は、過去における経済成長の結果、歴史上はじめて完全雇用の達成に近づき、労働力の不足を感じるようになった。37、38 年度は終戦後のベビーブーム時の出生者が中学を卒業する年次に当たる関係で、生産年齢人口の増加は戦後最大の 184 万人に達した」と日本経済が労働力不足経済への転換途上にあると指摘。38 年 3 月卒の求人倍率は中学 2.6 倍、高校 2.7 倍であったが、新規学卒者求人に関しての中小企業の充足率は 2 割前後しかなく、採用難は依然解消されなかった。ここに至って、団塊の世代は「金の卵」「集団就職」の最後の世代となる。

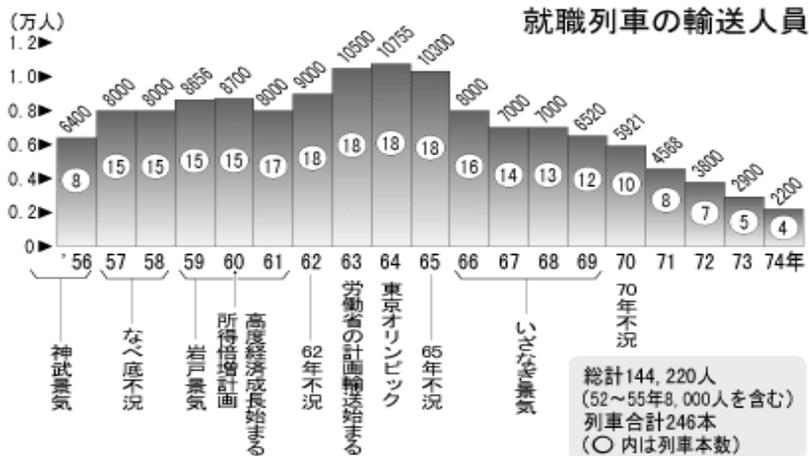
参考トピック

集団就職、最後の就職列車 (鹿児島県の場合)

企業は県内に会社の駐在員を配置するなど、求人戦線は年々し烈になり”青田買い”が問題になっていた。昭和 33 年 (1958) ごろ、県内で先生たちまでも買収する駐在員の実態まで明らかになっている。

集団就職列車は、地元で働く場が少なく、やむなく県外に流出する鹿児島の「貧しさの象徴」だった。女性を中心に U ターン者も多いとはいえ、若年層の大量流出は過疎化に拍車をかけたのも事実。さらに若年層の県外流出は、県内人口の高齢化を招いて労働力の低下をきたし、農村社会の崩壊すら危ぐされる現状の一因にもなった。(鹿児島新聞)

昭和 39 年 (1964)、鹿児島発就職列車の輸送人員はピークを迎えている。



**データ** 溢れるベビーブーム世代の人口、高校受験競争も勃発

義務教育終了者の高等学校進学は、経済成長が家計にもたらした経済的ゆとりや、教育に対する需要の増大等により、昭和 38 年頃から進学率が上がり、65%を超えるようになり、毎年約 70 万人以上の女性が高校へ進学するようになった。

中卒女子の進学率は、昭和 37 年 63.2%であったが、昭和 41 年には 70%を超え、飛躍的に向上している。その後、昭和 44 年以降は男子の進学率を上回り、平成 7 年には男女ともほとんどの者が高等学校に進学するようになる。

一方、年々、受験生も急増し続けているが、高等学校の新設、定員増など供給力(特に公立)に限りもあり、受験競争がはじまっている。

団塊世代女性の中学卒業生、進学者数

	女性中学卒業生 (人)	女性進学者数 (人)	進学率 (%)		就職しつつ進学 (%)	
			女	男	女	男
昭和 37 年	1,219,253	770,797	63.2	64.6	1.9	3.8
昭和 38 年	1,189,454	780,578	65.6	66.9	2.3	3.8
昭和 39 年	1,155,549	773,959	67.0	67.9	2.6	3.8
昭和 40 年	1,045,362	715,279	68.4	69.9	2.7	3.6
昭和 41 年	953,192	673,833	70.7	71.7	3.0	3.6

**参考トピックス**

**「親が子どもに受けさせたいと思う教育水準」(総務庁『生活意識調査』)**

昭和 35 年では、女子に短期大学以上の教育を受けさせたいとする者は 13%に過ぎなかった。この当時女性は高校進学までというのが親の願いであったことが伺われる。しかし、昭和 51 年には 42.5%、平成 6 年では 70.8%と、女子に対して高等教育を期待する傾向は男子に対するそれと並ぶようになっている。団塊の世代が親になると、自分達よりも高い教育を願う姿が見受けられる。しかし、その内訳は「短期大学へ」が半数を超えているが、「四年制大学以上へ」は少ない。

**『国民所得倍増計画』教育こそが経済成長の基本**

昭和 35 年(1960)10 月、政府は『国民所得倍増計画』を発表。

「現代社会経済の大きな特徴は、高い経済成長の持続と急速な科学技術の発展に支えられた技術革新時代ということである。経済政策の一環として、人的能力の向上を図る必要がある。産業社会の発展にとって人的能力の開発が急務である」ことを主張している。

それにともない、高校入試制度の改革で主要教科選抜方式に移行している。

受験体制が深刻になり、業者テストが学校内で横行し始めるなど、高校進学率の急上昇と受験競争が日常化し、予備校も充実拡大される。

データ 昭和 39 年、50%が『中の中』の生活水準。中の下は 30%、下は 8%、格差の時代

団塊世代の女性たちが中高生の頃の、日本社会の生活水準をみておこう。

昭和 30 年代後半から 40 年代前半にかけて、日本の社会は経済高成長の真っ只中にあった。家庭での耐久消費財の普及率は急速に高まり、三種の神器（冷蔵庫、洗濯機、掃除機）の普及率は昭和 30 年代末には 80%を超え、テレビ受信契約数は昭和 41 年に 1 千万台、昭和 42 年には自動車保有台数は 1 千万台、加入電話は 1 千万台となっている。

時代は西欧諸国型の合理的な生活へと大きく変わりはじめた。

昭和 39 年の『国民生活に関する世論調査』では、「中の中」が 50%の生活意識をもつという結果がはじめて顔を出している。

しかし、「中の下」とする層は 30%、「下」とする層は 8%もあり、高成長に「乗れた生活ができる層」と「乗れない層」に大きく分かれ始めている。

当然そのことが、団塊世代の女性達の、中学生、高校生の卒業後の進路（進学、就職）に大きな影響を与えている。

#### 国民生活に関する世論調査(データ)

##### 「階層帰属意識」

	中の合計	中の上	中の中	中の下	下		中の合計	中の上	中の中	中の下	下
昭和 33 年	72	3	37	32	17	昭和 45 年	89	7	57	25	7
昭和 34 年	73	3	37	33	17	昭和 46 年	90	8	56	26	6
昭和 35 年	77	4	41	32	13	昭和 47 年	90	7	58	25	7
昭和 36 年	76	4	41	31	13	昭和 48 年	90	7	61	22	6
昭和 37 年						昭和 49 年	90	7	61	22	6
昭和 38 年						昭和 50 年	91	9	59	23	5
昭和 39 年	87	7	50	30	8	昭和 51 年	90	8	58	24	6
昭和 40 年	86	7	50	29	8	昭和 52 年	90	8	59	23	5
昭和 41 年	87	7	52	28	7	昭和 53 年	90	8	58	24	6
昭和 42 年	88	6	53	29	7	昭和 54 年	92	9	61	22	5
昭和 43 年	87	8	51	28	8	昭和 55 年	89	7	54	28	7
昭和 44 年	88	7	52	30	8						

資料：国民生活に関する世論調査（総理府）

データ 団塊世代の「10代の女の子達」が、「ティーンズ」マーケットの誕生を促した

団塊の世代は、10歳を超えると、ロー、ミドル、ハイと『ティーンズ』を三分して捉えられている。そのように括れるだけ、それぞれの年齢段階で、大きなボリュームがあったわけである。

そのティーンエイジャーに目をつけたのは出版社と衣料品業界。

団塊世代の少女達向けに、学年誌に加えティーンに限定した雑誌が次々と創刊されていった。「リボン」「なかよし」(昭和30年)、「少女フレンド」(昭和37年)、「マーガレット」(昭和38年)など。

一方、団塊の世代のお姉さん達であるBG(ビジネス・ガール)向けには、芸能界・愛情問題を中心とした記事内容で、「女性自身」(昭和33年)、「女性セブン」(昭和38年)、「ヤングレディー」(昭和38年)が創刊され、戦前からの婦人誌に対抗して、戦後の新しいタイプ(自由を良しとする)の女性像が報道されている。団塊のティーンズ少女たちは、それを手に取り、大人の女になるための学習をしている。

4~5百万人という女の子達を相手とする「ティーンズ」マーケットが、日本ではじめて話題になり、ファッション、出版業界を潤わせた。

ティーンズ人口推移(男女計、単位千人)

年次	10~14	15~19
昭和35年 (第一次ベビーブーム)	11,018	9,309
昭和40年	9,183	10,852
昭和45年	7,978	9,167
昭和50年	8,282	7,949
昭和55年	8,960	8,272
昭和60年 (第二次ベビーブーム)	10,042	8,980
平成2年	8,527	10,007
平成7年	7,478	8,558

(各年・国勢調査)

団塊世代の女性の中高校生少女時代の創刊雑誌

昭和30年	りぼん、なかよし
昭和32年	週刊女性
昭和33年	女性自身
昭和34年	週刊平凡 少年サンデー 少年マガジン
昭和37年	少女フレンド
昭和38年	女性セブン、ヤングレディ マーガレット
昭和39年	平凡パンチ(みゆき族、モッズ、 VAN, JUN)
昭和41年	マリークワント(ロンドン)
昭和43年	ミニスカート

団塊世代が中学生の頃、ちょっと年上の高校や大学生が、銀座のみゆき通りや六本木界隈で、モッズファッションを身に纏いモンキーダンスに興じ、VANやJUNの欧米風ヤングファッションを楽しんでいる。そこに当時中学生であった団塊世代の強い憧れを見出し、男の子達は憧れのミュージシャンのギター演奏に夢中になりエレキギターを手にし、女の子は、グループサウンズに群がりミニスカートをはきはじめる。

団塊世代の少女達は新しいタイプの女性像の影響を受けながら、ティーンズ生活をそれなりに発見し楽しんでいる。

## 参考トピックス

### 団塊世代ティーンズに関する新聞のニュース関連記事 / 話題

#### ミルクティーン (昭和 37 年)

昭和 37 年のジャズ界は、20 年に一度しか出ないといわれる弘田美枝子 (15) 歳の出現以来、その年代の歌手が続出。これらを週刊誌がミルクティーン歌手と名づけた。その後一般のいわゆるローティーン (15 歳以下の) 年代層を指してこう呼んだ。

#### 番長 (昭和 38 年)

非行少年グループのリーダー。中学校や高校にかなりの組織をもち、自分達は街の暴力団やヤクザとつながっている。たかり、婦女暴行など大人並みに悪いことをやり社会問題としてクローズアップされた。少女グループの場合にはスケ番という。

#### カギツ子 (昭和 38 年)

団地住まいの共働き夫婦は、ドアの戸締りよろしく勤めに出かける。子供は学校に行くのにも、遊びにでるのにもカギを持っていく。団地族に代表される中産階級の生活像。少年非行化の温床となると危惧する向きもあった。

#### 青田買い (昭和 37 年)

貧農の収穫前の青田米を、安くたたいて買う青田刈りをもじったもの。求人難の会社が卒業前の学生にツバを付ける「人間の青田買い」が目立ってきた。就職戦線が売り手市場に変わってきたのである。

#### 三ト追放 (昭和 39 年)

進学競争激化のおり、一部の先生にみられる父兄からのプレゼント、学校出入りの業者からのリベート、そして先生みずからのアルバイト、という三つの「ト」を追放しようというもの。

#### 録勉 (昭和 39 年)

先生の講義など録音テープにとって勉強する学生の一風景

**ステップ** 18歳の転機・選択（高校卒業期）

高卒就職で社会人OLに、

そして自由恋愛と結婚準備に励む

昭和40年(1965)～昭和44年(1969)

**データ** 毎年40万人以上の高卒女子が、OL生活をはじめた。

日本経済は、昭和39年の不況を乗り越え、昭和40年を底として再び景気は上昇期（昭和45年夏までの「いざなぎ景気」）に入る。日本の企業活動が最も旺盛な時代である。

この時期に、団塊世代の女性は、高校卒業期を迎え、ほとんどの女性が就職（就職率約70%）する。そして、団塊の世代の高卒時において、女子就職者数が、高卒男子就職者数を上回る。

団塊女性が就職をする前までは、高卒就職者は約35万人（昭和39年）であったが、昭和40年以降、団塊世代の女性の高卒就職者数は、以前より約10万人増え、毎年約40～45万人となっている。

団塊世代の女子高校卒業者の約7割が就職しているが、高卒女子の就職率は、その後、大学進学率が高くなり、45年以降低下しはじめる。就職求人・採用は、その後、高卒から短大卒にとってかわる。

高校卒業後の状況

	卒業者数(人)			就職者数(人)		進学者数(人)	
	計	男	女	男	女	男	女
昭和39年	1,160,075	597,671	562,404	337,717	352,334	171,228	113,102
昭和40年	1,556,983	799,917	757,066	440,754	449,885	216,147	153,370
昭和41年	1,603,122	825,928	777,194	459,859	469,424	205,944	161,463
昭和42年	1,601,499	821,935	779,564	457,509	471,833	194,176	161,911
昭和43年	1,496,972	768,368	728,604	426,575	442,006	176,950	156,930
昭和44年	1,402,962	714,944	688,018	388,111	414,706	170,506	155,812
昭和45年	1,359,654	683,840	675,814	351,819	393,538	180,588	168,260

旧文部省 各年「学校基本調査」

**データ** 高卒女性の就職先は非製造業の事務職に ～ B Gから O Lへの第一期生～

中卒の就職先は、製造業中心の工員が中心であったが、高卒女子は、非製造業(金融 / 小売業など)の事務職が約 55%、販売職が約 20%となっている。

いわゆる、オフィス(事務所)に勤めるレディーの誕生である。昭和 50 年代まで金融や小売業従事者が高い割合を占めている。

高校卒業女性の就職先、職業別構成比(主なもの) 旧文部省 各年「学校基本調査」

	昭和 40 年	昭和 41 年	昭和 42 年	昭和 43 年	昭和 44 年
専門的技術的職業従事者	2.1	1.8	2.2	2.5	2.8
事務従事者	57.9	55.4	54.3	53.3	54.3
販売従事者	20.5	20.7	20.5	19.6	18.3
技能工、生産工程作業員	8.9	11.3	13.1	14.4	15.1
サービス職業従事者	5.2	5.5	5.1	5.5	5.2
上記以外のもの	1.6	1.7	1.5	1.3	1.2

**データ** 高卒 O L の夢は、「自由恋愛」と「結婚」そして「サラリーマン専業主婦」

戦前の多くの女性は、厳しい農作業、家内工業などに追われながら、家事・育児を行っていた。母親のそんな姿を見て育った団塊世代前後の若い女性にとって、サラリーマンと結婚し、専業主婦になることは、あこがれの生活。よき伴侶が見つかるまで O L 生活をしている。40 年代前半にヒットした、歌やドラマを見ると、以下のような彼女達のライフスタイルイメージが描かれる。

夫はサラリーマン、妻は専業主婦、郊外の住宅団地に住み、子どもは 2 人、高等学校進学は当然で、できれば女の子は短大又は大学まで、男の子は大学までの進学を目指して勉強している。

親は自分たち夫婦とは別居しているが、田舎で長兄夫婦と同居している。生活は特別豊かなわけではないが、苦しいわけではない。近所付き合いや親戚付き合いはあまり親密ではない。

■ 1970 年代前半に流行した結婚を主題とした歌 ■

年代	題名	歌詞
1971	結婚しようよ 【吉田拓郎】	僕の髪が 肩までのびて 君と同じになったら 約束どおり 町の教会で 結婚しようよ m... 古いギターを ボロンと鳴らそう 白いチャペルが見 仲間を呼んで 花をもらおう 結婚しようよ m...
1973	あなた 【小坂明子】	もしも私が家を建てたなら 小さな家を建てたでしょう 大きな窓と小さなドアと 部屋には古い暖炉があるのよ 真赤なバラと白いリボン 子犬のよこごは あなた あなた あなたがいてほしい それが私の夢だったのよ いとしいあなたは今どこに
1973	花嫁 【みすだのりみこと クライマックス】	花嫁は夜汽車に乗って とついでゆく あの人の写真を胸に 海辺の街へ 命かけて燃えた 恋が結ばれる 帰れない 何があっても 心に誓うの
1973	てんとう虫のサンバ 【チェリッシュ】	あなたと私が夢の国 森の小さな教会で 結婚式をあげました 照れてるあなたに虫たちが 接吻せよとまやしたて そっとあなたにまぐれました

データ

ファッション、自動車免許、海外旅行、自由恋愛～個人の自由を謳歌～

団塊の女性の多くの人達が就職をし、自ら収入を得るようになった。この当時は、家計生活において補助的収入源としての役割もあったが、自らの収入は、結婚準備のために貯蓄やファッション、旅行などに費やしている。ミニスカート、原宿族、グループサウンズ。これらが話題になるのが昭和 41 年。団塊の世代の先端年齢グループがちょうど 18 歳となった年である。高校を卒業した花のOL達が社会にどっと流れ込む時期でもあった。

ミニスカートに合わせパンティーストッキングとブーツが流行。渋谷、新宿、原宿のまちにそれらを身に纏った若者たちが集まりはじめるのもこの頃。日本の消費環境は、耐久消費財重視からファッション、インテリアへと移っていった。団塊の女性達が、所有する価値観を超えた、精神的な豊かさ、生きがいの追求をはじめたのである。若い女性を中心に、海外旅行、自動車免許獲得者が急激に増えている。車の持つ自由なハンドリングは、自由を尊ぶ女性達の象徴でもあった。

**参考トピックス**    **ファッションブーム**

**昭和 41 年**    ミニスカート、パンティーストッキング、ブーツ、原宿族

**昭和 43 年**    ツイッギー来日、ミニスカート旋風、ジーンズ&フォークロア

**昭和 44 年**    シースルー、スケスケルック、オーモレツ

**昭和 45 年**    万博コンパニオン、国鉄ディスカバージャパン、アンアン創刊、女の部屋創刊

**昭和 46 年**    ノンノ創刊、微笑、ウーマン創刊(ヤングアダルト向け)    ホットパンツ

**昭和 47 年**    アンアン・ノンノ、ピキニー一般化、ジャネット・リン人気、ニュートラ

運転免許所持数の推移(昭和 45～47 年)

(万人)	男	前年比	女	前年比
45 年	2168	5.4%	477	13.2%
46 年	2270	4.7	531	11.2
47 年	2368	4.2	580	9.4

昭和 47 年運転免許年齢層別所持率(女性)

年齢層 / 歳	所持者数	層別所持率
16～19	27 万人	7.9%
20～24	136	24.8
25～29	123	27.1
30～34	98	22.3
35～39	84	19.8
40～44	63	16.4
45～49	34	9.9

昭和 48 年「警察白書」

一姫二トラ三ダンプ(昭和 40 年)

女性ドライバーも増え、交通戦争における事故を起しやすい車の順位。一番危険なのが女性ドライバー、二番目が酔っ払いのトラック運転、三番目に乱暴運転が多いといわれるダンプカーの順。

**ポップ(昭和 43 年)**    ポピュラーミュージックの頭文字からとったとされるが、流行、共通、若さ、明るさ、軽やかさなど気分の言葉。当時、流行った花の首飾り、ブルーライトヨコハマ、涙の季節など若い女性の心を揺さぶった。

**アンノン族(昭和 47 年)**    「anan」(アンアン)に続き創刊された「non no」(ノンノ)ともに、若い女性向けの雑誌として、ファッションやグルメ、旅行などグラビアで展開。これらの雑誌を 20 代前半の団塊の女性達は小脇にかかえて旅を重ねた。そういった女の人たちをアンノン族と呼んだ。

**データ** 団塊女性達、短大、大学への進学率は、短大へは約 10%、大学へは約 5~6%

昭和 37 年頃から、経済生活も安定する中、僅かながら短大、大学への受験人口も増えて、女子大生が急増している。冗談交じりに大学を亡ぼすということで批判（『女子学生亡国論』）が高まるが、大学進学者数は確実に増え、短期大学への進学率が上昇を続けている。

しかし、「短大生は花嫁修行」だ、「大学生は良妻賢母づくり」だという見方が一般的な見方だったのも事実。

一方、大学に入ってから、男の牙城への斬り込みとも言える行動をする団塊の女性もでてきている。三派全学連結成（昭和 41 年）、安田講堂事件（昭和 43 年）、浅間山荘事件（昭和 48 年）へと引き継がれ、政治的コミットをする一部の女性たちが、大きな話題となる。重信房子、永田洋子などの女性闘士達が、主導的に活動しはじめている。

短大(本科)、大学(学部)の進学率(%)

資料；旧文部省 各年「学生基本調査」

	大学・短期大学への進学率			短期大学への進学率			大学への進学率		
	計	男	女	計	男	女	計	男	女
昭和 39 年	15.5	25.6	5.1	4.4	2.3	6.5	15.5	25.6	5.1
昭和 40 年	12.8	20.7	4.6	4.1	1.7	6.7	12.8	20.7	4.6
昭和 41 年	16.1	20.2	11.8	4.3	1.5	7.3	11.8	18.7	4.5
昭和 42 年	17.9	22.2	13.4	5.0	1.6	8.5	12.9	20.5	4.9
昭和 43 年	19.2	23.8	14.4	5.4	1.7	9.2	13.8	22.0	5.2
昭和 44 年	21.4	26.6	16.1	6.0	1.9	10.3	15.4	24.7	5.8
昭和 45 年	23.6	29.2	17.7	6.5	2.0	11.2	17.1	27.3	6.5

進学率 = 大学 / 短大入学者を 3 年前の中学校卒業業者数で除した比率・浪人含む

**参考トピックス**

**女性解放、政治意識の高まり**

- 昭和 37 年 女性学生亡国論      昭和 41 年 三派全学連結成
- 昭和 43 年 安田講堂事件      昭和 45 年 第一回ウーマンリブ大会
- 昭和 46 年 ジェーン・フォンダ〔女性反戦歌手〕来日、シラケ
- 昭和 47 年 中ピ連結成、連合赤軍事件
- 昭和 49 年 ベルサイユのバラ〔男のように思考するヒロイン〕
- 昭和 50 年 大学生 3 人に 1 人が女性と発表

**男性を上回る投票率の増加**

女性の投票率は、昭和 20~30 年代には特に国政選挙のレベルで男性に比べてかなり低かったが、徐々にその差を縮めて 40 年代前半に男性と逆転した。統一地方選挙では昭和 38 年に至り、知事選から市区町村議会の選挙に至るすべての地方選挙において、女性の投票率の全国平均が男性のそれを上回っている。

データ 短大卒も花のOLへ、大卒の就職先は4割が公務員に。厳しい企業の眼

短大卒の就職者数は、昭和42年5万人であったが、昭和43年以降6万人台に達している。職業別就職状況は、昭和30年ごろ過半数を占めていた教員（幼稚園等の教員が多い）の割合が減少し、事務や販売など進出分野が多様化している。これは、高校から大学への進学率の上昇で、高卒が取れなくなり、短大生の獲得に企業がシフトした。

一方、大学卒は、大卒女性の就職率は50%前後で、毎年、約3万人の就職者が出ているが、就職先も限られており、大卒女性の就職先は就職者全体の4割が公務員（教員が主）になっている。団塊の世代の大卒女性に対して、昭和46年には、リクルートルームを持つ企業が増え、求人対策の一環として、就職希望の学生を相手に就職相談室を開設しているが、積極的に企業内に組み込むことはなかったようである。

昭和50年代になって、産業別ではサービス業、職業別では専門的・技術的職業従事者（うち9割が教員）への偏りがみられたが、次第に他の分野への進出が進んだ。平成6年までには製造業、卸売・小売業、金融・保険業などの割合が高まり、事務従事者、販売従事者が増えるとともに、理工系の専攻者の増加の結果とみられるが技術者も増加している。

女性学歴別新規学卒就職率（%）の推移

	計	中卒	高校卒	短大卒	大学卒
昭和40年	39.0	26.0	62.9	57.4	66.7
45	39.3	16.1	61.2	68.8	59.9
50	30.6	5.9	48.0	73.0	62.8
55	29.4	3.2	45.6	76.4	65.7
60	28.2	2.9	43.4	81.3	72.4
平成2年	27.7	1.8	36.2	88.1	81.0
7	22.6	0.9	23.4	66.0	63.7

短大・大学卒（女性）の就職者数推移

短大卒		大卒	
昭和42年	50,631	昭和44年	29,190
昭和43年	62,238	昭和45年	32,353
昭和44年	68,435	昭和46年	30,969
昭和45年	65,459	昭和47年	34,504
		昭和48年	37,996

旧文部省 各年『学校基本調査』

大学卒業（女性）の就職先・職業別（主なもの）（%）

	昭和44年	昭和45年	昭和46年	昭和47年
専門的技術的職業従事者	57.9	58.6	54.8	52.8
管理的職業従事者	1.8	0.2	1.0	0.3
事務従事者	33.6	34.7	36.4	39.7
販売従事者	3.3	3.3	4.1	3.6
サービス職業従事者	2.3	1.9	1.8	1.9
上記以外のもの	0.5	0.8	1.3	1.3
合計	100.0	100.0	100.0	100.0
うち教員	37.0	39.1	36.9	35.8

資料；旧文部省 各年「学校基本調査」

**ステップ** 24歳の転機・選択（結婚適齢期、出産期）

恋愛結婚か見合い結婚か、

そして憧れの専業主婦・出産へ

昭和46年（1971）～昭和50年（1975）

**データ** 恋愛/見合い 自由を謳歌した団塊の女性達、自由恋愛から結婚へが65%、見合いは35%。

24、5歳で結婚し、約2年後の26、7歳で第1子を出産。さらに、その2、3年後に第2子出産というのが団塊世代の女性の一般的なライフスタイルである。

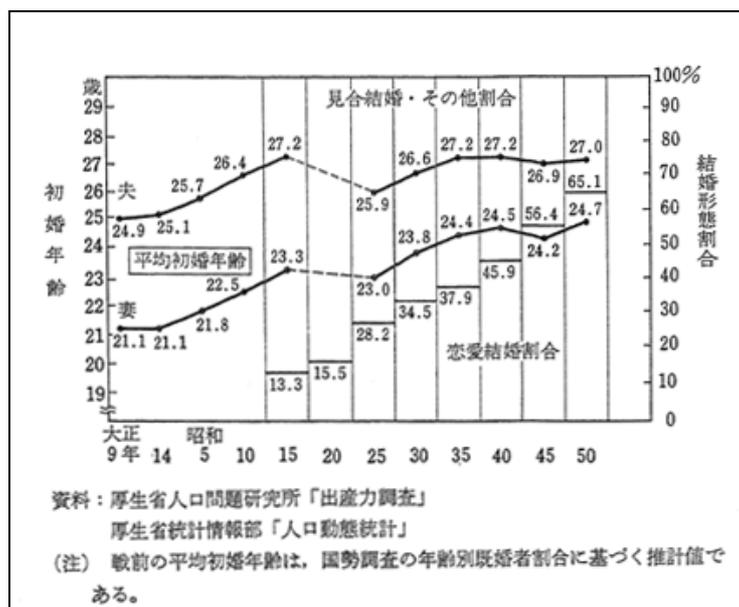
結婚相手は2.3歳年上。この団塊の世代から「恋愛結婚」での割合が、「見合い結婚など」を大きく上回る。

厚生省「出産力調査・人口動態統計」で、初婚年齢をみると、昭和50年のデータ（団塊の世代がちょうど25歳前後である）では、初婚年齢平均は妻が24.7歳、夫は27.0歳で2.3歳違い。結婚形態は、「見合い結婚など」が34.9%、「恋愛結婚」が65.1%となっている。

恋愛結婚と見合い結婚の割合の逆転は昭和45年から始まっているが、その後の5年間で約10%ポイントも恋愛結婚が増えている。見合い結婚は、現在では珍しいものになっているが、自由恋愛をして結婚へという流れを作ったのはこの団塊女性達である。

しかし、恋愛結婚ではなく見合い結婚を選択し、また家系血縁や地縁を大切にする女性たちも35%いた。

日本人夫婦の平均初婚年齢の推移と結婚形態の変化



データ - 結婚 - 年上と結婚が 80%、同年齢結婚は 10%、姉さん女房も 10%

結婚相手を「初婚夫妻の年齢差別にみた婚姻件数の年次推移」(旧厚生省「人口動態調査」)で見ると、昭和 45 年は、「夫が年上」が 79.5%と約 8 割にも及ぶ。中でも「3 歳差上」が一番多い。

一方、いわゆる姉さん女房である「妻が年上」は 10.3%となっている。

流行として目立つのは、当時ヒットした『同棲時代』(由美かおる)ではないが、「同年齢」結婚が 10%にもなっていることである。その後この「同年齢」結婚は増え続け、第二次ベビーブームである団塊ジュニアたちの結婚期には、倍の 20%に迫っている。平成 11 年には「年上の夫」とするのが 60%を切り、「妻年上」は 20%を超えている。

今流行りの『同年齢』『年下』との婚姻といった、新しい結婚スタイルに火をつけたのは、他ならぬ団塊世代の女性達である。男が引きずられた面もある。

団塊世代の女性達の自立性や古い家族形態への抵抗をそこに見ることができる。

初婚夫妻の年齢差別にみた婚姻件数の年次推移

年齢差	昭和 45	平成 2 年	7 年	11 年		昭和 45 年	平成 2 年	7 年	11 年
総 数	782 222	553 982	602 915	564 448					
	構成割合 (%)				夫年上	79.5	69.8	64.6	59.9
総 数	100	100	100	100	1 歳	11.7	13.7	14.3	14.6
妻年上	10.3	14.3	17.7	20.9	2 歳	12.7	12.2	11.6	11.3
4 歳以上	1.8	2.5	3.5	4.5	3 歳	13.2	10.5	9.7	8.9
3 歳	1.2	1.7	2.3	2.8	4 歳	12.4	8.9	7.8	6.8
2 歳	2.3	3.1	3.8	4.6	5 歳	10.5	7	5.9	5.1
1 歳	5	6.9	8.1	9.1	6 歳	7.7	5.3	4.4	3.7
同年齢	10.1	15.9	17.6	19.2	7 歳 ~	11.3	12.3	10.9	9.5

注：各年に同居し届け出たものの集計。資料；総数には年齢不詳を含む。(厚生省人口動態調査)

最終学歴別の平均初婚年齢

夫婦・結婚年次		中学校	高 校	専修学校	短大・高専	大学以上
夫	1977~82年	28.51歳	27.08	27.62	28.19	27.93
	1982~87年	27.22	27.28	27.31	26.52	28.56
	1987~92年	27.03	27.74	28.06	27.74	29.27
妻	1977~82年	24.98歳	24.53	24.80	24.97	25.99
	1982~87年	24.73	24.95	25.29	25.82	26.79
	1987~92年	23.61	25.18	26.06	26.53	27.33

資料出所：国立社会保障・人口問題研究所「第10回出生動向基本調査」(平成 4 年)

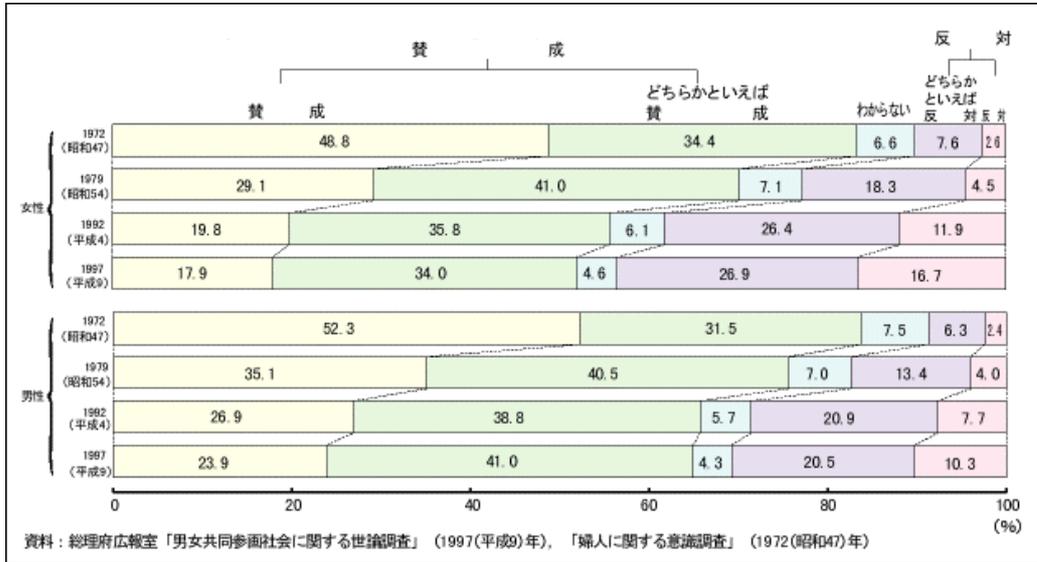
**データ** - 家庭 - 「男は仕事、女は家庭」という固定的役割分業があった。封建的な要素がまだ残る

1970年代前半（昭和40～45年）に、団塊世代の女性が大量に結婚（420万人、団塊世代の女性の78%）した頃、専業主婦率が最も高かった。自由恋愛から結婚退職、結婚後は専業主婦業というのが当時ノーマルなパターン。夢見た幸せなサラリーマンの妻の座である。

「男は仕事、女は家庭」という男女の固定的役割分業が最も徹底されていた世代でもあり、時代でもあった。そして、その家庭をいかに楽しくするのが、団塊女性の腕の見せ所であった。憧れの明るい家庭が具体化されてゆく。

一方、そのような風潮に対して、徹底的に抵抗し、未婚を続けている女性達も多い。その数112万人（昭和50年「25～29歳」の未婚者数、団塊世代の女性の約21%）が、当時の結婚適齢期（24.7歳）を過ぎても、結婚に抵抗している。

**「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方について**



**参考トピックス**

**「楽しんで何が悪い」のニューファミリー**

カーライフ、レジャー、インテリアブームが起こった昭和40、50年代

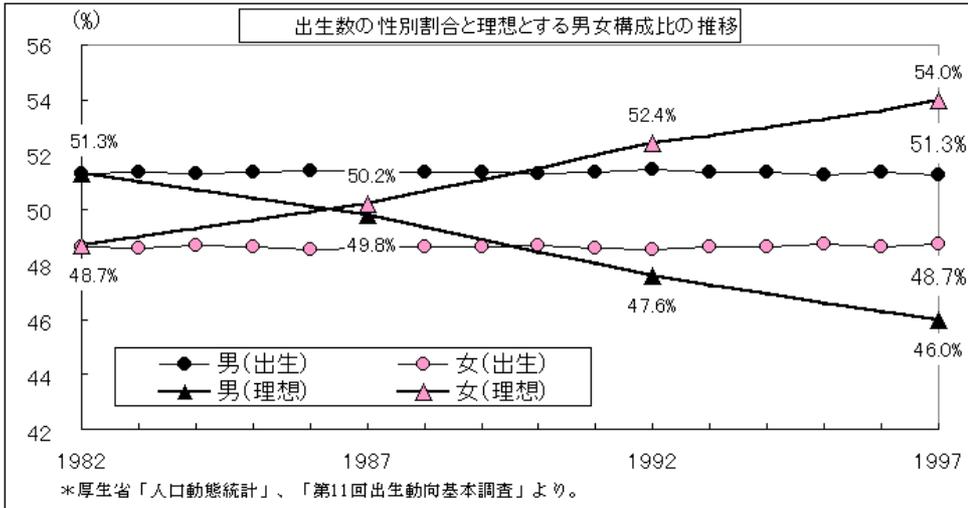
- 昭和42年 自動車保有台数1千万台突破、マイカー時代へ
- 昭和41年 ボウリング場新設ラッシュ
- 昭和47年 ボウリングレーンピーク
- 昭和48年 石油ショック、製品の買いだめに殺到。
- 昭和49年 朝日カルチャーセンター開講、主婦に人気
- 昭和52年 『知的生活の方法』（渡部昇一）出版、ベストセラーに
- 昭和53年 「美しい部屋」創刊
- 昭和54年 「ふたりの部屋」創刊

**データ** - 出産期 - 子供は、男児に限る。まだまだ男児を望む親が多かった。

自由な恋愛と、その結果としての結婚を成し遂げた女性達。結婚2、3年後に第一子を出産、そしてその2、3年後に第二子を産むわけだが、出産において「女兒より男児」を望む意識が強い時代で、封建社会の男社会的なものを尊重する意識がまだまだ残っている。

出生数の性別割合と理想とする子どもの男女構成比の推移を見ると、女兒出生を理想とするのが多くなるのは昭和62年(1987)から。それ以前は、『男児出生を理想とする』男女が多かった。

団塊世代の家庭での出生時期(昭和50年頃)は、男女ともに、当然、男児出生が理想であり、実際も男児のほうが多く生まれている。理想と現実が一致していたのである。



**データ** - 子供 - 第二次ベビーブーム。幼児教育・子育て競争に拍車

日本の人口ピラミッドを大きく変えつづけてきた団塊の世代であるが、その多くの女性達が結婚し、出産期を向かえたのが昭和45年から50年にかけてである。

昭和45年からの人口動態統計をみると、婚姻件数は年間100万件を超え、出生数は昭和23、24、25年の250万人までは及ばないが、昭和46年から3年続けて200万人を上回り、再び日本にベビーブームが起きている。今でいう団塊ジュニアの誕生である。育児、子育て競争の勃発である。

団塊世代の女性、出生数、婚姻、

年次	出生数(人)	出生率%	婚姻件数	離婚件数	離婚率%
1970 昭和45	1 934 239	18.8	1 029 405	95 937	0.93
1971 昭和46	2 000 973	19.2	1 091 229	103 595	0.99
1972 昭和47	2 038 682	19.3	1 099 984	108 382	1.02
1973 昭和48	2 091 983	19.4	1 071 923	111 877	1.04
1974 昭和49	2 029 989	18.6	1 000 455	113 622	1.04
1975 昭和50	1 901 440	17.1	941 628	119 135	1.07

資料；旧厚生省 各年「人口動態調査」

ステップ 35歳の転機・選択(育児・子育て・教育期)

子供の有無、自由時間利用、

子供の教育、再就職

昭和57年(1982)～昭和61年(1986)

データ 「子育ての成功は、有名大学入学なり」と確信する団塊世代の母親達

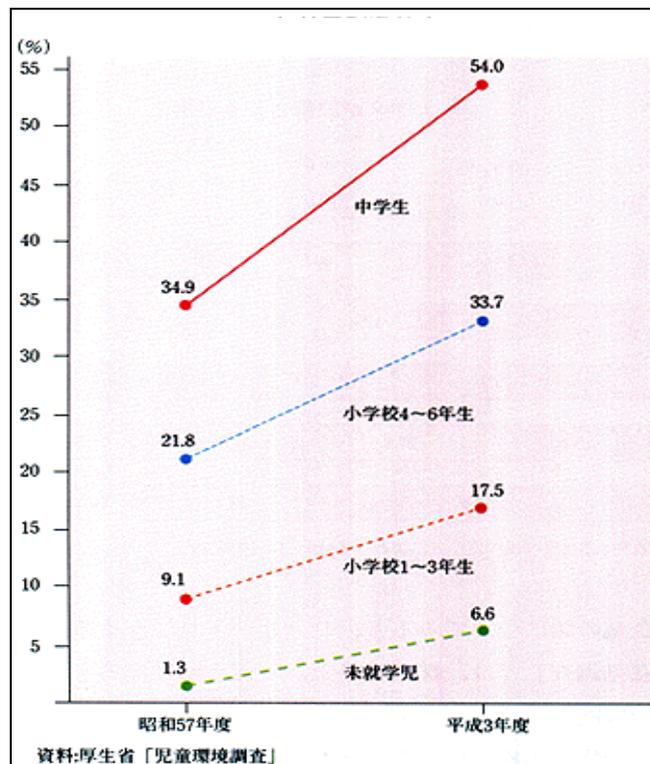
自分たちの中高生時代は、女性の進学は高校までといった社会風潮の中、数パーセントの人達しか短大や大学へ行けなかった。そして、結婚し専業主婦になったものの、会社勤めなど様々な生活をする過程で、実際の社会は、高学歴化が進行し、大学の中でも「有名大学」に進学させることが子どもの人生にとって重要な意味を持つということを知られる。

有名大学への入学が、子育ての「成功」を意味するものだという思い込みから、子どもの小さい頃から、受験勉強に過度に入れ込む風潮が広がった。それは、塾や私立学校の費用という形での付加的な経済的負担を生み出したが、それにも抵抗し『新しい夢』に挑戦していった。

「児童環境調査」によると、昭和57年の子供の通塾率は、未就学児は1.3%、中学生は30%となっている。昭和42年に導入された学校群制度は、10数年後、受験生を私立高校に向かわせ、団塊世代である母親達の一部が、子供の受験に熱心な行動をとりはじめる。

学歴偏重の社会的風潮や受験競争の激化が蔓延しはじめたのである。

年齢層別通塾率



**データ** 家庭と育児の両立に悩みつつ再就職に抵抗はない。

昭和 57 年（団塊の世代の女性たちが 35 歳位）以降の「労働力調査」をみると、末子の年齢が 3 歳未満の妻については、有業者の比率は低く、ほとんど変わっておらず、女性の就業にとって乳幼児の育児が大きなネックになっている。

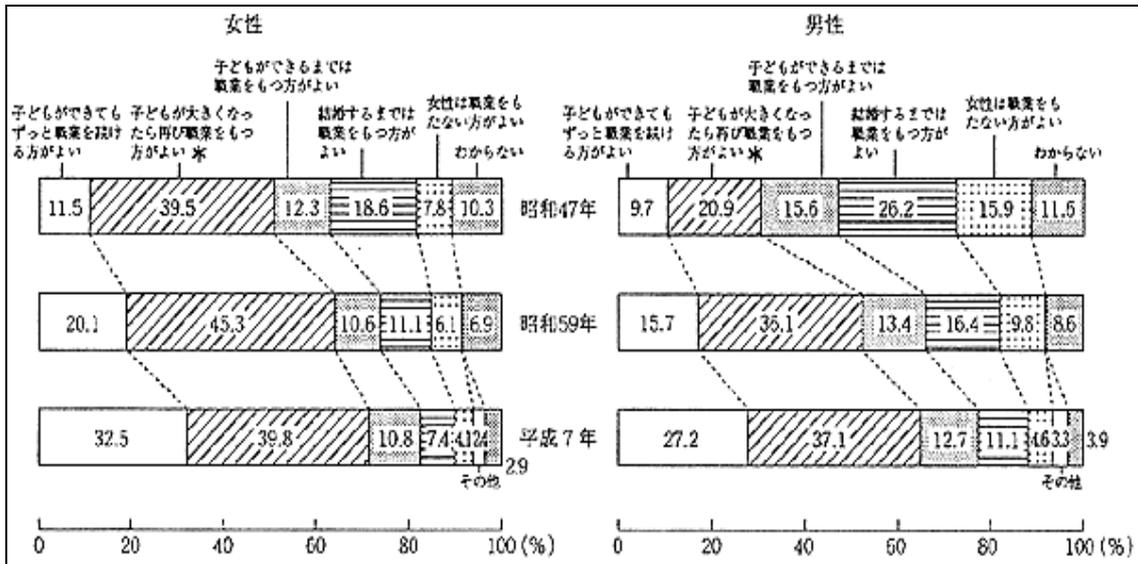
しかし、子どもがいない妻、及び、末子の年齢が 3 歳以上の妻については有業者の割合は高く、年々高まっている。

団塊の女性たちが子育てを終えたあと、職場やパート・アルバイトにつくことが多くなり、昭和 63 年（1983）に、「サラリーマン世帯の妻も半数が働き出すようになった」と国民生活白書で指摘されている。

日本社会で主婦が働くことが肯定的に見られるようになった。

再就職、職場復帰などの行動を促したのは、団塊世代の多くの女性たちが、高校卒業後、会社での勤労生活を経験してきたことも大きな影響を与えている。

女性が職業を持つことについての考え 「平成 8 年女性白書(総理府)」



**参考トピックス**

**主婦でも、子供が大きくなったら職業を持つ方が良い**

女性が職業を持つことについての意識調査では、前の世代に比べると、団塊世代の女性（昭和 59 年調査）の意識は、「子どもができたなら職業をやめ、大きくなったら再び職業を持つ方がよい」という考えに大きく変わっている。

家庭も育児も自分も上手に使い分けて生活する意欲を持っていることがわかる。実際は、その両立に悩みつけながらの主婦生活者がほとんどであった。しかし、一方で、子供のいない主婦は働く婦人としてかなりの地位を得る女性も多く、教育界においての進出（教頭、校長職など）は目覚ましい。

**データ** **家電を駆使し、「時間からの開放」と「自由な行動」を勝ち取った新しい専業主婦達**

団塊の世代の女性たちが結婚期を向かえた昭和48年(1973)には、マンション供給戸数は年間109,600戸となり、戦後はじめて10万戸を超え、第三次マンションブームを迎えている。そして、中流家庭の耐久消費財・電化製品が、約400万世帯の新しいニューファミリーに普及する。

すでに三種の神器の普及率は80%を超え、新3C〔カラーテレビ、カー、クーラー〕商品や生活用品をスーパーマーケットや家電センターで買い求め、便利で快適な生活をはじめている。

昭和50年代初頭(昭和50~53年)には、経済情勢は高成長から安定成長に転じ、同時期の消費支出平均伸び率は1.4%増と低調であったが、耐久消費財への支出は年平均6.7%増と著しく伸びている。この高い耐久消費財の伸びを支えたのが団塊世代の女性たちの新しい家庭生活(軽量で楽しい合理的、効率的な電化製品を使用)である。

ルームクーラー(普及率:昭和51年19.5% 昭和59年49.3%)を代表とする新3C商品に加え、ふとん乾燥機(普及率:昭和53年6.2% 昭和59年18.7%)、ビデオ(普及率:昭和53年1.3% 59年18.7%)と新製品が生まれた。従来白ばかりだった、洗濯機・冷蔵庫などもカラー化され、ニューファミリーのライフスタイルを反映した新しい商品が生まれ、家電市場を引っ張った。その一方で、日本国内のモーターゼーションが進み、自動車の年間国内販売台数は500万台を越え、車は一家に1台以上の普及を見せるようになる。

昭和45年にケンタッキーフライドチキン、昭和46年にマクドナルド、ミスタードーナツ、昭和49年にデニーズと上陸した外食産業の発展と、チェーンストア方式が郊外で急成長を見せはじめ、郊外ロードサイドにショッピングセンターが姿を見せ始めるのも昭和50年代。

団塊世代の女性達は、子供の頃テレビで見たアメリカのホームドラマの家庭にあった芝生のあるおしゃれな家、大型家電製品やおしゃれな料理。車でのショッピング、などなど、結婚を機会に、その強い憧れを『新しい専業主婦』として、次々に具体化してゆく。

耐久消費財保有状況(非農家/保有世帯、%)

	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年
電気冷蔵庫	62.4	90.8	96.7	99.1	98.5
電気洗濯機	72.4	91.6	97.5	98.7	98.1
電気掃除機	41.4	73.8	92.9	96.2	97.4
ルームエアコン	2.0	7.3	19.8	42.9	54.8
電子レンジ			16.6	33.5	42.8
カラーテレビ		28.6	90.5	98.3	99.1
ミシン	78.5	84.3	84.4	88.5	81.0
ピアノ	4.6	8.4	13.1	16.8	19.4
カメラ	57.8	69.8	79.8	84.6	88.4
乗用車	9.1	22.0	38.9	54.2	65.8

資料：経済企画庁「家計消費の動向」各年2月

データ 団塊世代の専業主婦たちの「不満」と「主婦役割からの脱出」、そして、自分探しへ

いったん家庭に入ったニューファミリーの妻たちにとって、「自立」はすぐに手の届くものではなかったことも事実。団塊世代の女性が30歳前半の昭和57年（1982）頃に、斎藤茂男の『妻たちの思秋期』がベストセラーになった。「結婚して、主婦になりきっていたのが、子どもが小学生や中学生になって手が離れたとき、ふと気がつく。もう若くはないワタシ。いったいワタシは何をしているのかしら、こんなことをしていいのかしら」と、漠然とした不安感にとられる主婦像が描かれている。昭和55年の頃には、「主婦アル中」が問題になっている。アメリカでは、こぞって主婦になった50年代の妻たちの不満を背景にウーマンリブ運動が勃発しているが、それと同じことが、日本ではもっとも主婦化が進んだ団塊の女たちに起きている。『妻たちの思秋期』の翌年、話題のドラマ「金曜日の妻たちへ」（登場する三組の夫婦は、学生運動の経験もある団塊の世代）が放映された。「三食昼寝つきで安泰」というニューファミリーの幻影を追い求めて専業主婦となった団塊世代の女性の多くは、その後、子どもから手が離れて、いっせいに再就職（パートが中心）している。経済的事情だけではなく、家庭と教育と自分といった三つ巴の悩みの中で、社会に参加し活動することで、生き甲斐を見出す女性たちが増えている。

■ <年表>1970年代後半～1980年代前半(昭和50年代) ■

S51	【ベストセラー】 エリカ・ジョング「飛ぶのが怖い」	結婚からの解放(＝離婚)が主題。「翔んでる女」という流行語も生まれた。
S52	【テレビドラマ】 「岸辺のアルバム」	郊外中流家庭の崩壊という現実を初めて真正面から取り上げたテレビドラマ。
S53	【雑誌】 「クロワッサン」	「女の新聞」に編集方針を転換。「女の自立」を主題に仕事をもち、「自立」した女性の生き方を紹介。「キャリアウーマン」という流行語も生まれた。
S54	【ベストセラー】 久徳重盛「母原病」	昭和30年ころから子どもに増えている小児喘息や吃音などの病気が「母親の育児本能」が壊れたことが原因で起こる病気と主張。
S55	【雑誌】 「とらばーゆ」	働く女性の増加を背景に女性の職業紹介誌が創刊された。
S55	【事件】 金属バット両親殺人事件	郊外の教育熱心な中流家庭の子どもが両親を金属バットで撲殺した事件。
S55	【ベストセラー】 山口百恵「蒼い時」	絶頂期で結婚・引退した山口百恵の自伝。この年、松田聖子がデビュー。
S56	【ベストセラー】 田中康夫「なんとなくクリスタル」	ブランド商品名を散りばめ、都市の若い女性の豊かな消費生活を描いた小説。
S57	【ベストセラー】 穂積隆信「積木くずし」	家庭内暴力の娘との関わりを父親が描いた実話に基づく小説。
S57	【ベストセラー】 斎藤茂男「妻たちの思秋期」	郊外に住む中流家庭の中高年の専業主婦たちが会社人間の夫たちへの不満や寂しさ、生きることへの目標喪失感からアルコールにおまかれていき、あるいは、自分から離婚を宣告して分かれていく軌跡を追った報告。
S58	【テレビドラマ】 「金曜日の妻たちへ」	郊外に住む団塊世代の3組の夫婦の一見平和で優雅な生活の中で、妻たちが、なんとなく物足りなくなると不倫に傾いていく。「キンマ」は不倫

(参考；落合恵美子『21世紀家族へ』など)

**ステップ 50歳の転機・選択（中高年期）**

**家庭・家族からの解放、仕事か自立か介護か・・・**

平成9年(1997)～現在

**データ** 共働き世帯の増加。目的は経済の自立、老後の生活資金、家計の補填？

昭和60年には非農林雇用者世帯のうち妻が専業主婦の世帯は、55.3%、共働きの世帯は41.9%であったが、その後、共働き世帯は増加し平成4年には初めて共働き世帯が専業主婦世帯を上回った。なお、平成7年には景気後退の影響から再び専業主婦世帯が共働き世帯を上回った。

妻・夫の就業状態別にみた雇用者世帯（非農林業）：総務庁『労働力特別調査』（各年2月）

	昭和60年	平成2	3	4	5	6	7
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
妻・夫とも雇用者	41.9	46.6	48.4	49.1	49.0	48.8	47.1
夫が雇用者妻が非就業者	55.3	50.8	49.0	48.5	48.3	48.1	49.6
妻が雇用者夫が非就業者	2.8	2.6	2.6	2.5	2.7	3.2	3.3

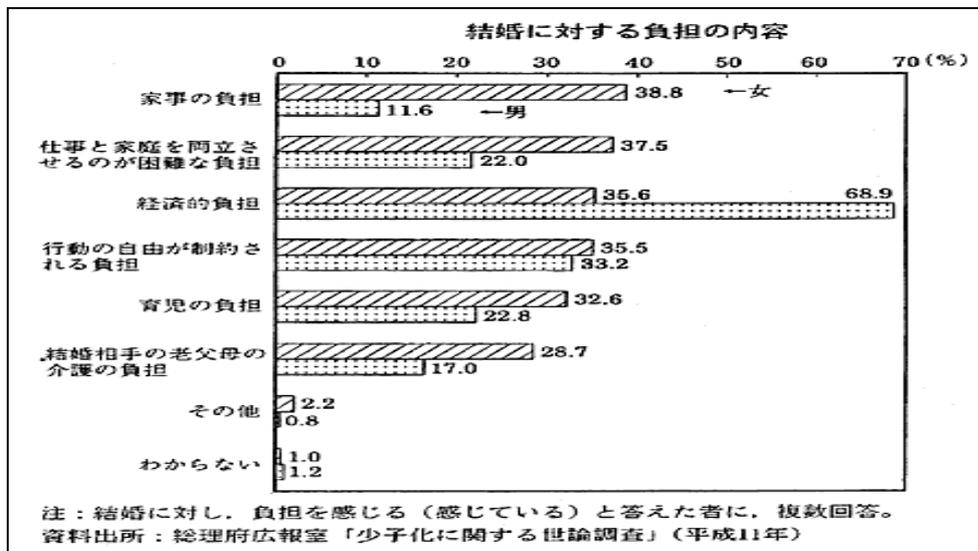
（単位：％）

**データ** 結婚の負担感につながっていた「家事・育児責任」は、いつまで続くのか

結婚に対して負担を感じる（感じている）者がどのような内容の負担を感じているか。

女性の場合、「家事の負担」、「仕事と家庭を両立させるのが困難な負担」が4割近くと高くなっており、「経済的負担」を第一に挙げる男性と対照的である。女性の結婚への負担感は、仕事をもつ女性が増加しているにもかかわらず、女性が家庭責任を負っている状況に変化がないことから生じていると考えられる。経済的に自立できる女性達に、夫の『妻は家事』という固定的な考え方に絶えられないとする、中高年女性が出てくるのは当然である。

子供たちも結婚するなど、主婦としての役割を終えたと考える人が、今後も増えるに違いない。



データ 進む家族の高齢化、女性が担う、同居者介護

総務庁統計局「人口推計」によれば、平成 11 年 10 月 1 日現在、我が国の総人口は 1 億 2,669 万人であり、うち、高齢者人口（65 歳以上人口）は 2,119 万人で、総人口に占める高齢者人口の割合（高齢化率）は 16.7%である。高齢者人口を男女別にみると、女性 1,237 万人に対して男性は 882 万人で、男女の比率は女性 100 に対して男性 71.3 となっている。

長い高齢期をいかに過ごすかは、男性に比べて女性にとってより重要な問題になっている。高齢の寝たきり者の主な介護者の続柄をみると、86.1%が同居者が主な介護者となっており、その内訳としては、年齢が上がるにつれ、配偶者の割合が減少し、子及び子の配偶者の割合が上昇する。また、75 歳以上では子の配偶者の割合が子より高くなっていることが注目される。

また、寝たきり者の主な介護者（同居）の場合、続柄にかかわらず、女性の割合が高い。特に、子の配偶者の場合は、99.7%が女性である。

介護者の性別	総数	配偶者	子	子の配偶者	父	母	その他の親族・非親族
（推計数、千人）							
総数	308	106	73	103	16	10	
男	51	28	20	0	1	2	
女	257	78	52	103	16	8	
（構成割合、%）							
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
男	16.5	26.2	27.7	0.3	5.2	18.4	
女	83.5	73.8	72.3	99.7	94.8	81.6	

資料出所：厚生省「国民生活基礎調査」（平成10年）

データ 上昇する離婚率、離婚も『自分探し』の選択肢の一つ、視野に入った離婚

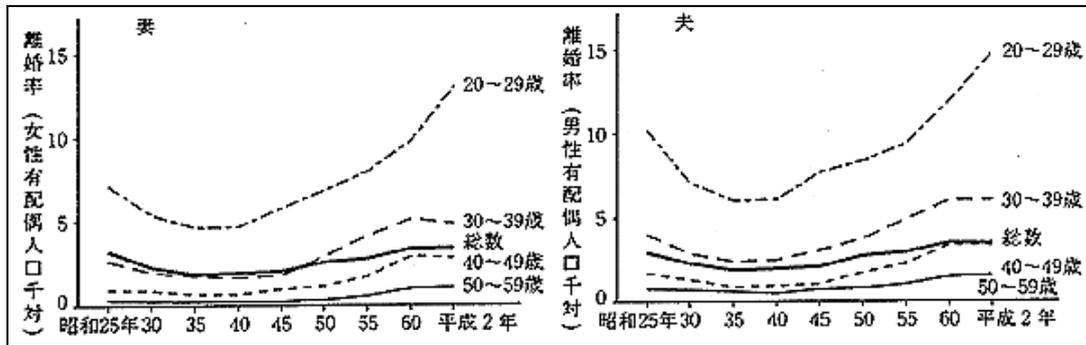
団塊の世代の結婚ブーム後(昭和 49 年～51 年)から、急激に 20 歳代の離婚率が高くなり、年を重ねるたびに、過去の年齢世代よりその年齢別離婚率は高まっている。

若いときにも離婚は多かったが、会社や組織を優先し、育児・介護といった家事一般を妻に押し付けてきた中年男性を中心に、子供の独立とともに離婚を言い渡されるケースが増えているようだ。

「同居期間別に離婚件数の割合の年次推移」によると、同居期間「20 年以上」のいわゆる「熟年離婚」の割合が高くなっている。（件数、1970 年 5 千組、1995 年 32 千組）

「男は仕事、女は家庭」といった意識において男女意識の差異があり、又、一方で、近年パート労働者の増加等により、「家計に占める妻の収入の割合」は年々増加するなど、夫婦関係と女性の社会進出が必要とされるなど意識と実態との軋轢が、離婚を一つの選択として容認されるようになってきている。

別居時の年齢別にみた離婚率（女・男有配偶人口千対）

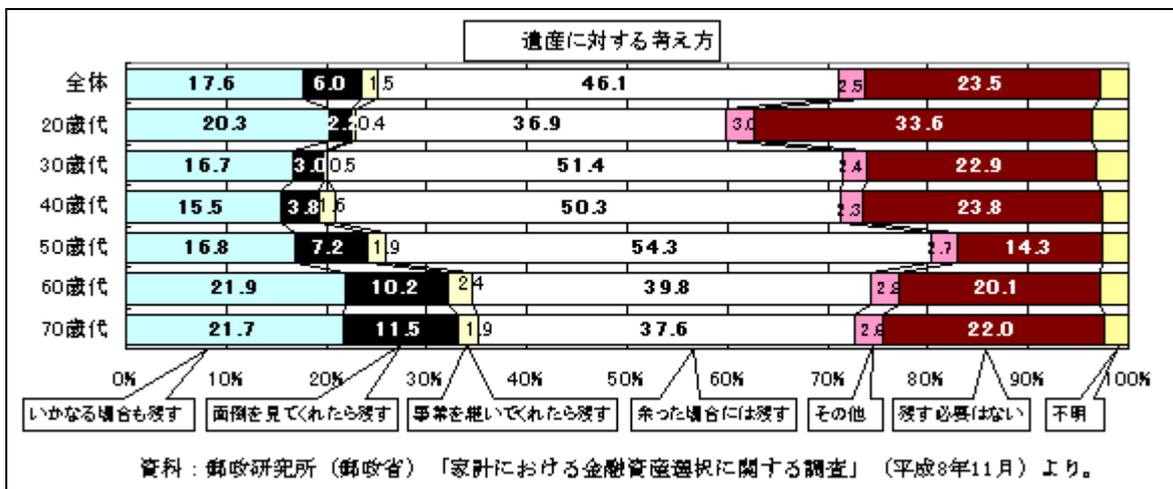


厚生省「人口動態統計」におけるそれぞれの年齢層の離婚者数を同年の総務庁「国勢調査」における有配偶者数で割って算出。

**データ** 豊かな老後を楽しむ、遺産相続も『新しい考え方』で処理をする

人々の価値観は千差万別であるため、子供への贈与・相続意識も否定はしないが、やはり自分で貯えた資産は自らのために活用するのが一つの理想的な姿としている人たちが多く。そうした傾向が強まり、それぞれ、個人の事情に合わせ、新たな充実した老後生活像を描き始めている。もちろん、「楽しみたい」のに「楽しめない」老後生活を余儀なくされる人たちも出てくる。

団塊の世代(50歳)から遺産相続等の意識が変わり始めた



将来の高齢社会を形成する人々である「団塊の世代」は、国民生活白書（平成10年版）でも指摘するように、従来の高齢者とは異なる価値観を有し、「自分の財産は残すよりも自分で使う」や「豊かな老後生活を楽しむ」という米国籍のライフスタイル志向が強いと言われている。

従来「衣・食・住」等の基礎的消費への消費と捉えられることが多かった「高齢期の消費」は、今後そうしたものに止まらず、いかに生活の質を高めるか、充実した老後生活を暮らせるか、という発想が重視されるものとなる。

## まとめ 1 『大きな塊』から『個性的なライフスタイル』を持つに到った団塊世代の女性達

### 1. ライフステージごとに、分裂しつづけた「大きな塊」

出生から小学校、中学生まで、ほぼ「一つの大きな塊」であった団塊世代の女性たちは、「中学卒業/進学」からはじまって、「高校卒業/進学」「結婚/出産/子育て」「再就職/中高年主婦」などライフステージが変わるたびに、その塊を、バラバラに分解し続けてきた。

その分解は、そのライフステージごとにおいて、「古いものへの反抗と自由の獲得」の行動にあった。その行動は、就職をして自らの収入を得ること、恋愛結婚をすること、未婚のままであること、車を乗り回すこと、一人で旅行に出ることなど、前の世代である大正、昭和の典型的な女性や主婦（主婦で居つづけることが重要）達と正反対の行動として顕れている。その行動の積み重ねが、女性の行動を狭めてきた古来の大家族制を、急速に消滅へと向かわせている。

しかし、555万人すべての団塊世代の女性が、そのような行動を取れたわけではない。そこには、個々の価値観にもとづく様々なライフスタイルを生み出している。そこが又、『大きな塊』という特殊性を持った団塊世代の特徴でもある。個性化と多様化は同居しているのである。一律、画一ではない。

今回の研究レポート『私たちの履歴書』から見た団塊世代の女性の特徴を上げてみると

団塊の女性達は、一方で人口の大きな塊、一方で史上初の高度経済成長、一方で革命的民主教育といった三すくみのなかで、『学校』『就職』『結婚』『子育て』の機会が訪れている。

そして、その都度、それぞれの選択や行動により、『大きな塊』がライフステージごとに、分解され拡散し、単一的であった生活スタイルが、多様な生活ライフスタイルを生み出していった現在の多様な生活状況が、ライフステージごとのそれぞれの選択や行動(学歴、結婚形態、家族構成の変化などにおける)に大きく影響を受けている

団塊世代の女性達に共通しているのは、「自ら収入を得ること」「古い家意識を良しとしないこと」などを容認していることである。中高年になっても7割以上の女性が、仕事(就業)をするようになり、主婦で居続けるといった大正・昭和のそれとは、全く異なっている

若いときに、団塊の女性たちが、様々な形で社会に影響を与えつづけたように、中高年になっても新しいタイプの中高年生み出している

さらに、将来にわたっても団塊女性は「女性の新しい生き方」を求めていることを予感させる

2. 『仕事をする』中高年の団塊世代の女性達、3つのグループに区分される

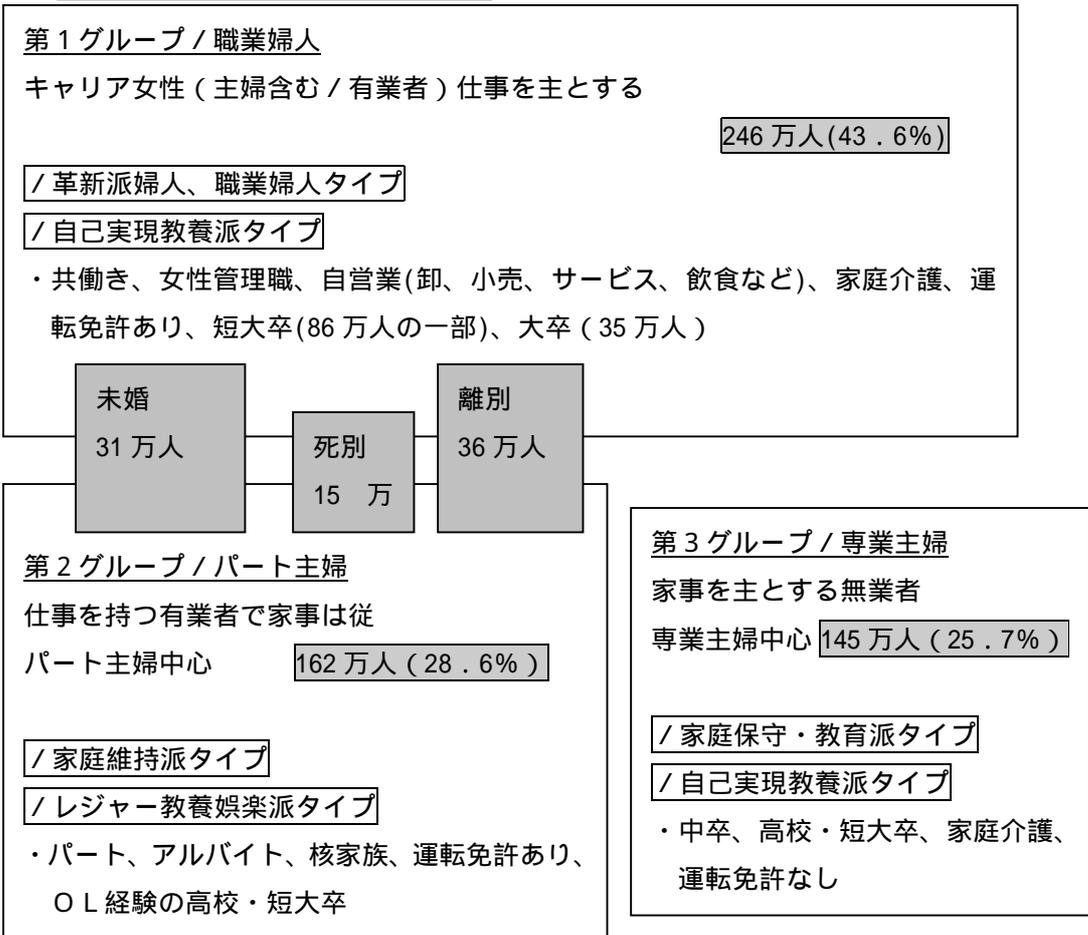
中高年になった団塊世代の女性達の現実には、職場を追われたり、夫や自分の収入に支障をきたしたり、子供が就職できなかったり、老人介護に追われたり、或いは自己実現のために教育や教養に励む人達など、多様な個人の生活がはじまっている。そして、又一方で、こういった生活の中でも、将来をどう過ごすのか、その方向性を探る点検作業をそれぞれがはじめている。

団塊世代の女性は、中学卒業までは、『ティーンズ』という一つの塊で括ることができたが、中卒就職、高卒就職、短大卒就職を通じて、ばらばらになりつつも、ほとんどの女性は会社員としての生活を体験している。さらに、主婦になっても、子育て後にも再就職をする人も多かった。

中高年になった団塊世代の女性達の約50%弱が自ら収入を得るために働き、約30%がパートやアルバイトで収入を得る仕事をしている。現在、仕事をもたず(主婦がその多くを占める)にいる団塊の女性は、約25%に過ぎない。

「仕事をする中高年女性の誕生」。これが、団塊世代の最大の特徴である。現在の中高年女性の生活は、少なくとも『仕事と収入』という軸で大きく3つのグループに仕分けられる。そこには、若いときの「会社員経験の有無」、と同時に「学歴の有無」、「子供の有無」が大きく影響している事が伺える。

収入 / 仕事環境によるグルーピング



3. 若い時の「転機における行動選択」で、5タイプのライフスタイルにグルーピングされる

仕事や収入などの環境を前提としながらも、様々なタイプの生き方、例えば、「自己実現に熱心」「老後を楽しむ」など、5~6タイプのライフスタイルパターンを読み取ることができる。団塊の女性の、今のライフスタイルタイプの形成には、学歴と就職の経験有無、結婚の是非と結婚形態、子供の有無と教育、家族構成など、ライフステージごとでの、それぞれの選択が深くかわり、ライフステージごとの選択が、現在の状態に結びつく大きな岐路となっている事が伺える。

中高年になるまでの、これまでのライフスタイル(卒業、就職、結婚、出産期における選択)と現在の収入環境・家族環境とのつながりを掛け合わせてみると、およそ5つのタイプに分類することができた。『一つの大きな塊』が、ライフステージごとに、選択肢は拡がり、団塊の世代の女性達は分解され、世代という枠を越えて、個性的な生き方を歩んでいる。

タイプ別 グルーピング

グループ	タイプ	ライフスタイル(学歴、結婚形態、子供教育、家族構成)
<b>第1 グループ</b>  キャリア女性(主婦含む/有業者)仕事を主とする 246万人 (43.6%)	<b>職業婦人革新派</b>  (キャリア女性)	・短大卒(86万人の一部)、大卒(35万人) ・恋愛結婚、見合い結婚半々 ・未婚者、離別、死別など核家族が多い(約80万人) ・共働きで女性管理職(教育関係が多い) ・自営業(卸小売、サービス、飲食など) ・運転免許あり
	<b>自己実現教養派</b>	・高校卒一部、短大卒、大卒一部(OL経験あり) ・未婚、離婚者が多い、夫婦ふたりの専業主婦 ・恋愛結婚、子供無しが多い、 ・運転免許なし
<b>第2 グループ</b>  仕事を持つ有業者で家事は従、パート主婦中心 162万人 (28.6%)	<b>現状維持派</b>	・中卒、高卒、短大卒 ・恋愛結婚、核家族、夫婦ふたり ・運転免許無し
	<b>レジャー教養娯楽派</b>	・高校・短大卒(OL経験あり) ・自由恋愛、結婚、子供あり、核家族 ・子育て終了後再就業、パート、アルバイト、 ・運転免許あり
<b>第3 グループ</b>  家事を主 専業主婦中心 145万人 (25.7%)	<b>家庭保守派</b>	・中卒、高卒、短大卒 ・見合い結婚(35%) ・専業主婦(145万人)中心、 ・三世代家族、老人介護 ・子供は有名大学

## まとめ 2 「私たちの履歴書」から浮き上がってきた団塊の女性達キーワード

### 1) 家庭 / 家族 核家族化と家族分裂へ、その当事者たち！

戦前の家父長制の家族社会が崩壊し、親と子とを単位とする核家族が増加した。住宅統計調査によると、5人以上の世帯の割合は昭和58年の24.3%が平成5年では19.3%と、10年間で5ポイントも下がってしまった。一方で単身や二人世帯の増加が著しい。単身と二人世帯では同じく昭和58年が27.5%であったものが平成5年では35.0%と飛躍的にのびている。この核家族化と単身世帯化の流れを作っていたのは、団塊の世代の人たちに他ならない。当事者なのである。

核家族化の第一段階は、団塊の世代の前の世代に多く見られるが、日本の景気も良くなり、産業の拡大と共に集団就職や大学進学という名の下に世帯の分離が進み、自らが核家族として都市に生息している。第二段階では、都会に出た子世代のさらなる分裂である。団塊世代の子供が社会人となり、新世帯を持つことになった。中には、同居を続けるパラサイトシングルを抱える団塊世代世帯もあるが、多くは夫婦での二人世帯を占めている。リストラに遭っている親の財力にも限りが見え、たちまち独立を迫られる団塊ジュニアの世代は共存共栄の同棲や夫婦別姓のディンクス世帯が増えてくる。勿論、単身世帯も増加し、家族の単位をさらに小さくしている。

子育て後の女性の社会進出をきっかけに、別居や熟年離婚も増加する兆しを見せており、ますます核分裂を引き起こす引き金が増えているようである。

### 2) 住宅 / 住まい 持てるもの、持たざるもの、団塊が故の需要と供給の不均衡

大都市の人口は安定し、スプロール化しながら拡大してきた。多くの若者を集め、その家族を増やすことで大都市はさらに人口を集中させてきた。その結果、大都市に住む年代の住宅需要時期が逼迫して住宅地の地価の値上がりを生み、結果として持てるものと持たざるものを作りだした。やがて、バブル経済は破綻したものの経済は沈滞し、「住まいは甲斐性」の論理が、焦って買ってしまった住宅ローンを不動産の値下がりでも買い換えもできない状況を作り出した。上昇した地価は次第に下がってはいるが、バブルの付けは個人にも重くのしかかっている。住まいという基本的なものを社会的に担保しなかった日本の政策の罪でもある。

### 3) 教育 国の教育政策に振り回された

#### 高成長経済政策の夢を託され、ターゲットとなった

団塊の世代が中学生であった昭和35(1960)年10月、政府は『国民所得倍増計画』を発表した。この計画は、「現代社会経済の大きな特徴は、高い経済成長の持続と急速な科学技術の発展に支えられた技術革新時代ということである。この科学技術を十分に理解し、社会と産業の要請に即応し、進んで将来の社会経済の高度発展を維持しつづけていくには、経済政策の一環として、人的能力の向上を図る必要がある」と述べて、産業社会の発展にとって人的能力の開発が急務であることを主張した。そして、「この際わが国における長期的課題は中等教育(高校・大学など)の完成である。この計画期間中最も重要なことは、科学技術者および技能者の量的確保とその質的向上である」と続けている。中学校段階での能力主義教育を進め、1966(昭和41)年の中央教育審議会答申『後期中等教育の拡充整備について』が指

示したような後期中等教育（高校）段階での多様化政策を生み出すこととなった。と同時に、学力をめぐる新しい競争主義が始まることになる。

#### 私的競争を煽った教育指導で、負けず嫌いの世代イメージに

中学校現場での学力競争が、学校間・学級間競争から生徒間の私的競争へと変化してゆくのも60年代後半から70年代の特徴である。とくに、昭和36年（1961年）に全国の中学校2、3年生を対象とした「一斉学力調査」が実施された。各県、各市町村間、学校間の学力競争を激しいものにしていった。学力テストの平均点数を上げるために、教育現場であってはならないような事態（アルバイトする教師）が起きたりした。昭和44年（1969）には実質的に中止に至った。

#### 高成長で学歴社会の効用が見えはじめた社会に

わが国の産業構造が第1次産業から第2次産業中心の「重厚長大」型の産業構造 - それも繊維・化学工業から製鉄・自動車・重化学工業 - へと構造転換するにしたがい、国民生活に一定のゆとりが生まれて学歴社会の効用が見えてくると、中学生の高校進学率が急上昇し、しかも高校多様化政策が新たな学力競争を産むことになった。

中学校教育に関しては、高校進学率の急上昇と受験競争を日常化し始めた。例えば、高校進学率は昭和35年（1960）年の57.7%から昭和45年（1970）年には82.1%となり、新規就職者のうち中卒者が占める割合は、1960年には49.7%と半数近かったのが1970年には19.8%と急減している。また、高校入試制度の改革が、主要教科選抜方式に移行するなかで、受験体制が深刻になり、業者テストが学校内で横行し始めることになった。

### 4) 生活価値観 新しい生活意識、価値観を体現し続ける団塊の世代

高経済成長期を迎えた日本だが、子ども・青年たちの生活意識や価値観を大きく変換させることとなる。その当事者は団塊の世代に他ならないが、そこで変わった価値観が団塊世代のその後に大きな影響を与えつづける。

#### 経済的価値観が『カネ・モノ』支配的に

日常生活では、ロ・ティ・ンの平均「睡眠」時間は、9時間7分（昭和35年・1960）から8時間35分（昭和48年・1973）、「家事」時間は41分（昭和35年・1960）から23分（昭和48年・1973）へと減少している（NHK調査）。

彼らの意識や価値観は、大人社会の構造や意識を反映して、「カネとモノ」など経済的価値が支配的になって、社会正義などへの関心が低下していく一方、学校での受験競争が日常化してゆくことになる。

#### ファッション、レジャー、雑誌・漫画などサブカルチャーに洗礼され、新しモノ好きに

昭和41年にビートルズが来日、「プレイボーイ」創刊。深夜放送も全盛で落合恵子や土井まさるなどが活躍した。昭和40年頃からアイビー族が流行し、ファッション面では、昭和45年前後は若い女性を「アンノン族」（当時の人気雑誌「アンアン」「ノンノ」の読者層）と呼び、彼女達が国内旅行を好むことに対し、国鉄が「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンを展開し、国民の一般認識レベルでも、欧米に追い付いたことをシンボリックにあらわした。

テレビでは、昭和41年に開始されたNHKの朝の連続ドラマの「おはなはん」、クレージーキャッ

ツの「シャボン玉ホリデー」、藤田まことのあたり前田のクラッカー「てなもんや三度笠」が大人気に、あるいは、「鉄腕アトム」「オバケのQ太郎」などアニメ、「ウルトラマン」シリーズなどが子供たちの人気を集めるなど、人気番組が続出。

#### 男女平等主義がシンボルに

昭和45年にジーンズが大流行し、同年「ウーマンリブ」運動、昭和47年「中ピ連」結成と、男女平等主義と行動の時代のシンボルでもあった。

#### 楽しさ、やさしさ、ゆとりを求める

一方、「おおきいことはいいことだ（森永チョコレート：昭和42年）」「わんぱくでもいい。たくましく育て欲しい（丸大ハム：昭和43年）」「オー！モーレツ！（丸善石油：昭和45年）」「狭い日本、そんなに急いでどこに行く（交通安全標語：昭和48年）」のような、名作CMが続出し、消費者は、楽しさや、好イメージやゆとりを求め始めた時代であった。

#### 過疎と過密が日本に同居し始めたが、再び問題として再浮上

外国からエコノミックアニマルといわれ、家庭を顧みない企業戦士がわが国の経済成長を支えたのであるが、他方では、農業などの第1次産業が衰退しただけでなく、極端な過疎と過密地域を生み出し、さまざまな格差や矛盾をも生んだ。団塊の世代が中高年になると、高齢化をテーマとする過疎問題として再び浮上。

#### **5) 仕事 女性の職場進出がめざましい**

かつての農業社会では、女性は身近なところで生産のために働き、かつ家庭内の家事労働も引き受けていた。その後、工業化とともにサラリーマン化が進んだが、サラリーマン世帯の妻の多くは、家事労働に専念する専業主婦となった。しかし、経済のサービス化などの経済社会環境の変化の中で、サラリーマン世帯の妻も社会で収入を得て働き出すようになった。その割合は1988年には、半数を超えるものとなった。

その動きは、世界的に起こっている。もはや後戻りすることのない大きな流れである。

以上

参考資料 1 団塊の世代が育った時代年表

年代	社会	生活	流行		
1945 S20	終戦	買い出し列車 / ヤミ市 / 戦災孤児	リンゴの歌		戦後の日本には、文化水準は高いが生活水準は低いという現代とはまったく逆の現象が起こった。戦時下の束縛から脱し、男女同権が叫ばれ、6・3・3制がスタートする。団塊の世代が誕生し、朝鮮戦争の好況にも恵まれ、戦後10年を待たず経済は戦前水準を回復する。
46 21	憲法公布				
47 22	6・3・3制スタート	給食開始	東京ブギウギ	0歳	
48 23		<b>団塊の世代生まれる</b>		1歳	
49 24	湯川秀樹ノーベル賞			2歳	
50 25	朝鮮戦争		鉄腕アトム	3歳	
51 26	日米安保調印		「羅生門」	4歳	
52 27				5歳	
53 28		テレビ本放送	街頭テレビ	6歳	
54 29			プロレス	7歳	
55 30	ガット正式加盟			8歳	
56 31	経済白書「もはや戦後ではない」		太陽族	9歳	
57 32				10歳	
58 33	東京タワー完成	三種の神器 / 団地族 / インスタント	フラフープ	11歳	白黒テレビ、電気冷蔵庫、電気洗濯機の三種の神器に象徴される大量消費時代に入る。アメリカ生活様式へのあこがれも加わり、家電ブーム、続いてマイカーブームが起こる。都市では団地が建設され、合成繊維の技術革新とあいまってファッションが一般化する。
59 34		マイカー元年		12歳	
60 35	所得倍増計画 / 安保デモ / スモッグ	カラーテレビ本放送	ダッコちゃん	13歳	
61 36		交通戦争		14歳	
62 37				15歳	
63 38	ケネディ暗殺	公害		16歳	
64 39	東京オリンピック 東海道新幹線開業	海外旅行自由化 カギっ子	みゆき族	17歳	
65 40	ベトナム戦争始まる	マイホーム		18歳	
66 41	中国文化大革命	冷凍食品	ビートルズ 来日	19歳	
67 42		3C時代 / 核家族 / 中流意識 89.2%	フォーテン族	20歳	

68	43	学生運動	3億円強奪事件			21歳	70年までの15年間、日本経済は年10%以上の成長を遂げ、一億総中流と言われるほど生活は豊になった。一方、団塊の世代を中心とした学生運動が激化。公害問題が深刻化し、産業優先、自然破壊が反省される。「モーレツからビューティフルへ」のCFが流れたのは70年。
69	44	アポロ11号月面着陸			男はつらいよ第1作	22歳	
70	45	大阪万博 / よど号事件 / 三島由紀夫自決 / 光化学スモッグ				23歳	
71	46			カップメン マクドナルド1号店		24歳	
72	47	列島改造論 / 日中国交正常化 / 排ガス規制 / 浅間山荘事件			恍惚の人	25歳	
73	48	第1次石油ショック				26歳	
74	49			コンビニ開店 / 進学塾 / 外食産業	暴走族	27歳	
75	50	ベトナム戦争終結	偏差値			28歳	
76	51	ロッキード事件		ニューファミリー	およげ! たいやきくん	29歳	
77	52			独身貴族、サラ金		30歳	
78	53	共通一次試験	校内暴力	カラオケ流行	インベーダーゲーム	31歳	
79	54	第2次石油ショック		キャリアウーマン マンションブーム	ギャル	32歳	
80	55	自動車生産台数世界一		家庭用ビデオ	漫オブーム	33歳	
81	56			宅配便急増		34歳	
82	57		単身赴任	海外旅行		35歳	
83	58			軽薄短小時代 東京ディズニーランド	おしんブーム	36歳	
84	59		いじめ	テレビゲームブーム	金ピ	37歳	
85	60	プラザ合意 男女雇用機会均等法		分衆	イッキ! 0イッキ!	38歳	85年9月ニューヨーク・プラザホテルで開かれた

86	61		新人類		DC ブランド流行	39 歳	「先進5か国蔵相会議」を機に、急激な円高が始まる。円高で生活がさらに豊になる一方、バブル経済をもたらし、その崩壊とともに長期不況に突入する。95年阪神大震災が発生、高速道路が壊れ、インターネットの活躍が注目される。社会、経済、生活すべてが転換期を迎える。
87	62	ブラックマンデー	DINKS		マルサ	40 歳	
88	63		ペレストロイカ		Hanako	41 歳	
89	H1	バブル	セクハラ		オバタリアン	42 歳	
90	2	東西ドイツ統一	株価暴落		ファジー	43 歳	
91	3	ソ連崩壊	損失補てん	地球にやさしい	ポケベル	44 歳	
92	4	地価下落	リストラ	カラオケボックス	携帯電話	45 歳	
93	5	規制緩和	コメ部分開放		Jリーグ誕生	46 歳	
94	6	価格破壊	就職氷河期	ヤンママ コギャル	イチロー	47 歳	
95	7	阪神大震災	地下鉄サリン事件	ボランティア	NOMO / Windows95	48 歳	
96	8			アムラー	援助交際	49 歳	
97	9	金融不安	日本版ピクバン		失楽園 / たまごっち	50 歳	
98	10	長野オリンピック				51 歳	
「国民生活白書」平成7年版、「現代用語の基礎知識」（自由国民社）等をもとに作成							

## 参考資料2 データ編

データ編 平成 11 年(1999 年) 1 日現在 全国, 年齢各歳人口

(千人)	総人口		
	男女計	男	女
総数	126 686	61 972	64 714
2 3	1 854	948	906
2 4	1 926	985	941
2 5	2 016	1 032	984
2 6	2 043	1 041	1 002
2 7	1 997	1 015	982
2 8	1 949	986	963
4 5 歳	1 659	833	827
4 6	1 770	885	884
4 7	1 874	937	937
4 8	1 994	997	997
4 9	2 147	1 073	1 073
5 0	2 368	1 184	1 184
5 1	2 344	1 170	1 174
5 2	2 238	1 118	1 120
5 3	1 402	697	705
5 4	1 505	742	762
5 5	1 840	906	934

総務庁、「年齢別人口」平成 11 年(1999)

データ編 団塊の世代/出生数(厚生省/人口動態調査)

年次	出生数	出生率	婚姻件数	婚姻率	離婚件数	離婚率
1947 昭和 22	2 678 792	34.3	934 170	12	79 551	1.02
48 23	2 681 624	33.5	953 999	11.9	79 032	0.99
49 24	2 696 638	33	842 170	10.3	82 575	1.01
1950 25	2 337 507	28.1	715 081	8.6	83 689	1.01
51 26	2 137 689	25.3	671 905	7.9	82 331	0.97
52 27	2 005 162	23.4	676 995	7.9	79 021	0.92
53 28	1 868 040	21.5	682 077	7.8	75 255	0.86
54 29	1 769 580	20	697 809	7.9	76 759	0.87
55 30	1 730 692	19.4	714 861	8	75 267	0.84

データ編 進学率推移(文部省『学校基本調査』)

	高等学校へ			大学へ			短期大学へ		
	計	男	女	計	男	女	計	男	女
昭和 30	51.5	55.5	47.4	7.9	13.1	2.4	2.2	1.9	2.6
31	51.3	55.0	47.6	7.8	13.1	2.3	2.1	1.6	2.6
32	51.4	54.3	48.4	9.0	15.2	2.5	2.2	1.6	2.9
33	53.7	56.2	51.1	8.6	14.5	2.4	2.1	1.4	2.8
34	55.4	57.5	53.2	8.1	13.7	2.3	2.0	1.3	2.8
35	57.7	59.6	55.9	8.2	13.7	2.5	2.1	1.2	3.0
36	62.3	63.8	60.7	9.3	15.4	3.0	2.5	1.5	3.5
37	64.0	65.5	62.5	10.0	16.5	3.3	2.8	1.6	4.1
38	66.8	68.4	65.1	12.0	19.8	3.9	3.5	1.9	5.1
39	69.3	70.6	67.9	15.5	25.6	5.1	4.4	2.3	6.5
40	70.7	71.7	69.6	12.8	20.7	4.6	4.1	1.7	6.7
41	72.3	73.5	71.2	11.8	18.7	4.5	4.3	1.5	7.3
42	74.5	75.3	73.7	12.9	20.5	4.9	5.0	1.6	8.5
43	76.8	77.0	76.5	13.8	22.0	5.2	5.4	1.7	9.2
44	79.4	79.2	79.5	15.4	24.7	5.8	6.0	1.9	10.3
平成 8	95.9	94.8	97.1	33.4	41.9	24.6	12.7	2.3	23.7
9	95.9	94.8	97.0	34.9	43.4	26.0	12.4	2.3	22.9
10	95.9	94.8	97.0	36.4	44.9	27.5	11.8	2.2	21.9
11	95.8	94.8	96.9	38.2	46.5	29.4	10.9	2.1	20.2

データ編 就職率(文部省『学校基本調査』)

区分	中 学 校			高 等 学 校			短 期 大 学			大 学		
	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女
昭和 35	38.6	39.7	37.5	61.3	63.7	58.6	58.9	79.5	49.8	83.2	86.3	64.1
36	35.7	36.6	34.8	64.0	65.0	62.9	62.5	84.6	54.0	85.6	88.4	69.1
37	33.5	34.3	32.6	63.9	63.9	63.9	59.8	82.3	52.2	86.6	89.4	70.0
38	30.7	31.2	30.1	63.4	62.5	64.5	62.1	82.1	55.2	86.2	88.9	70.6
39	28.7	29.1	28.4	63.9	61.4	66.7	64.5	81.4	58.9	85.6	88.3	71.0
40	26.5	26.9	26.0	60.4	57.9	62.9	63.8	84.1	57.4	83.4	86.6	66.7
41	24.5	24.6	24.4	58.0	56.3	59.7	61.3	85.1	54.0	79.9	83.5	61.9
42	22.9	23.1	22.7	58.7	56.8	60.8	60.8	82.6	55.9	80.5	84.3	62.1
43	20.9	21.1	20.6	58.9	56.8	61.1	63.5	82.9	59.9	81.7	85.3	64.0
44	18.7	18.9	18.4	58.9	56.6	61.4	68.0	82.4	65.6	79.0	83.1	61.5
45	16.3	16.5	16.1	58.2	55.4	61.2	70.3	80.5	68.8	78.1	82.8	59.9
46	13.7	13.8	13.5	55.9	52.7	59.2	70.3	76.8	69.2	79.0	83.4	60.8
47	11.5	11.4	11.5	53.0	49.5	56.5	69.8	72.8	69.3	75.7	80.0	57.9
48	9.4	9.4	9.4	50.4	46.8	54.0	73.0	71.5	73.2	75.3	78.9	60.3
49	7.7	7.7	7.7	48.0	44.5	51.6	75.6	75.3	75.6	76.9	80.1	63.9
50	5.9	5.9	5.9	44.6	41.1	48.0	73.3	75.6	73.0	74.3	77.5	62.8
9	1.4	2.1	0.7	23.5	25.7	21.3	67.9	56.9	68.9	66.6	67.5	64.8
10	1.3	1.9	0.7	22.7	25.0	20.5	65.7	51.7	67.0	65.6	66.2	64.5
11	1.1	1.6	0.6	20.2	22.4	18.1	59.1	44.4	60.5	60.1	60.3	59.8

(注) 各年3月卒業者のうち、就職者(就職進学者を含む。)の占める割合である。

データ 編 団塊の女性の配偶関係(4区分)時代推移(国勢調査)

年次	年齢	実 数					配偶関係別割合(%)			
		総 数	未 婚	有配偶	死 別	離 別	未 婚	有配偶	死 別	離 別
昭和40年	15 ~ 19	5 420 641	5 340 132	70 567	6 635	957	98.5	1.3	0.1	0.0
昭和45年	20 ~ 24	5 382 751	3 856 300	1 491 402	15 611	17 942	71.6	27.7	0.3	0.3
昭和50年	25 ~ 29	5 368 294	1 122 569	4 175 836	11 506	57 483	20.9	77.8	0.2	1.1
昭和55年	30 ~ 34	5 350 186	486 040	4 709 754	24 968	126 071	9.1	88.0	0.5	2.4
昭和60年	35 ~ 39	5 339 814	354 259	4 713 636	48 613	220 493	6.6	88.3	0.9	4.1
平成2年	40 ~ 44	5 308 305	305 934	4 625 552	83 548	277 966	5.8	87.1	1.6	5.2
平成7年	45 ~ 49	5 290 031	297 368	4 499 156	139 355	337 387	5.6	85.0	2.6	6.4
平成12年	50 ~ 54									

データ 編 就業状態別、年齢別人口(千人) / 構成比(%) (就業構造調査 / 平成9年)

女(歳)	100.0	有業者						無業者			
		総数	仕事主	家事が従な者				総数	家事	通学	その他
				総数	家事主	通学主	両方				
100.0	50.1	32.6	17.4	15.8	1.1	0.5	49.9	33.9	7.1	8.9	
15 ~ 19	100.0	16.0	8.3	7.7	0.3	7.1	0.3	84.0	1.6	80.1	2.3
20 ~ 24	100.0	71.0	61.7	9.3	2.5	6.0	0.8	29.0	9.6	14.8	4.6
25 ~ 29	100.0	64.3	54.4	9.9	9.0	0.4	0.5	35.7	31.2	0.9	3.6
30 ~ 34	100.0	54.4	36.7	17.7	17.2	0.1	0.4	45.6	43.2	0.2	2.1
35 ~ 39	100.0	61.9	35.9	26.1	25.4	0.1	0.6	38.1	36.6	0.1	1.4
40 ~ 44	100.0	70.3	40.5	29.8	29.1	0.0	0.6	29.7	28.4	0.0	1.2
45 ~ 49	100.0	72.8	43.6	29.2	28.6	0.0	0.6	27.2	25.6	0.0	1.5
50 ~ 54	100.0	67.7	42.2	25.5	24.9	0.0	0.6	32.3	30.6	0.0	1.7
55 ~ 59	100.0	59.8	37.7	22.1	21.5	0.0	0.6	40.2	37.2	0.0	2.9

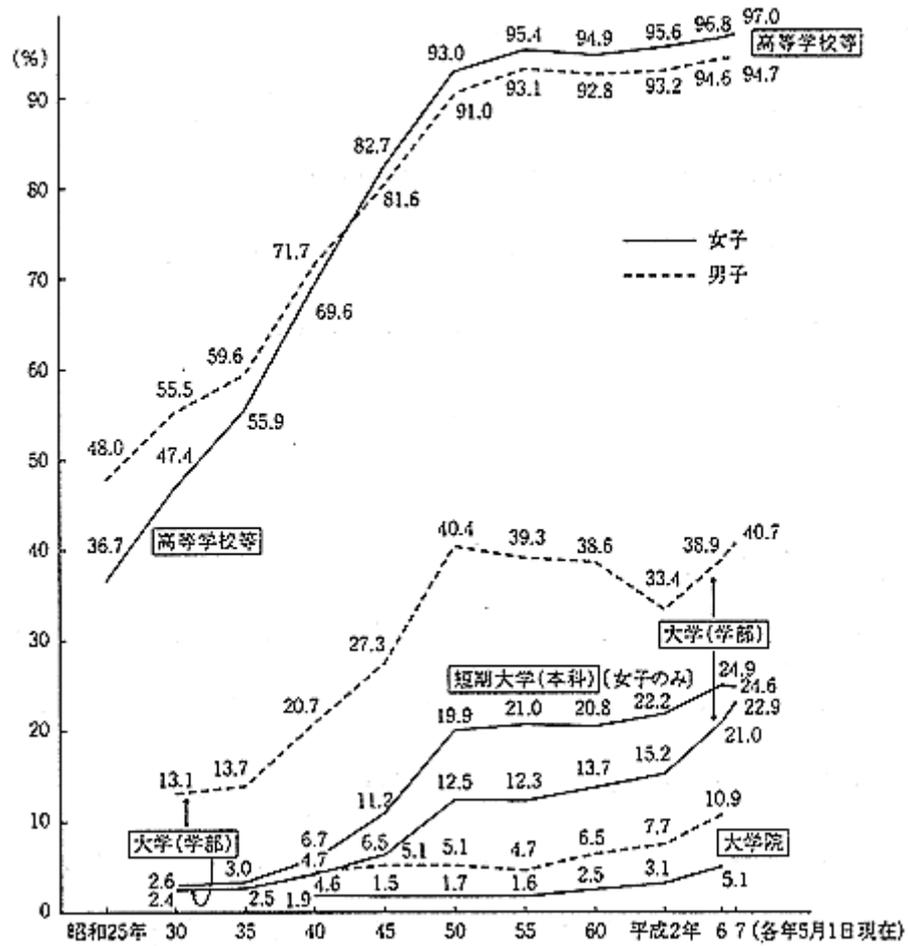
データ編 配偶関係（4区分），年齢（5歳階級），女・15歳以上人口 - 全国

（昭和45年～平成7年 / 国勢調査）

年次, 年齢 (5歳階級)	実 数					配偶関係別割合 (%)				
	総 数	未 婚	有配偶	死 別	離 別	未 婚	有配偶	死 別	離 別	
昭 和 50 年	1975									
女	43 560 794	9 375 614	27 750 600	5 518 000	904 818	21.5	63.7	12.7	2.1	
15 ~ 19 歳	3 908 266	3 853 457	52 339	1 279	666	98.6	1.3	0.0	0.0	
20 ~ 24	4 507 983	3 121 468	1 368 165	3 036	13 711	69.2	30.3	0.1	0.3	
25 ~ 29	5 368 294	1 122 569	4 175 836	11 506	57 483	20.9	77.8	0.2	1.1	
30 ~ 34	4 621 200	354 194	4 148 446	31 230	86 712	7.7	89.8	0.7	1.9	
35 ~ 39	4 209 754	222 646	3 814 679	67 394	104 438	5.3	90.6	1.6	2.5	
40 ~ 44	4 099 007	204 704	3 635 215	132 692	125 688	5.0	88.7	3.2	3.1	
45 ~ 49	3 704 909	180 448	3 150 613	231 980	141 072	4.9	85.0	6.3	3.8	
50 ~ 54	3 164 934	119 229	2 510 260	405 587	128 775	3.8	79.3	12.8	4.1	
55 ~ 59	2 600 973	68 479	1 817 481	622 680	91 267	2.6	69.9	23.9	3.5	
60 ~ 64	2 347 911	46 967	1 402 257	832 096	65 379	2.0	59.7	35.4	2.8	
65 歳 以上	5 027 563	81 453	1 675 309	3 178 520	89 627	1.6	33.3	63.2	1.8	
昭 和 55 年	1980									
女	46 040 309	9 617 234	29 472 446	5 716 939	1 129 136	20.9	64.0	12.4	2.5	
15 ~ 19 歳	4 048 560	4 008 078	38 381	40	370	99.0	0.9	0.0	0.0	
20 ~ 24	3 880 910	3 014 896	848 796	1 133	11 087	77.7	21.9	0.0	0.3	
25 ~ 29	4 495 887	1 076 874	3 348 413	6 980	60 236	24.0	74.5	0.2	1.3	
30 ~ 34	5 350 186	486 040	4 709 754	24 968	126 071	9.1	88.0	0.5	2.4	
35 ~ 39	4 606 865	253 773	4 155 679	56 262	138 166	5.5	90.2	1.2	3.0	
40 ~ 44	4 178 510	185 781	3 738 371	110 217	140 792	4.4	89.5	2.6	3.4	
45 ~ 49	4 057 241	180 415	3 523 372	200 942	147 966	4.4	86.8	5.0	3.6	
50 ~ 54	3 653 059	162 076	3 007 949	327 754	149 438	4.4	82.3	9.0	4.1	
55 ~ 59	3 102 126	109 344	2 324 015	531 242	129 151	3.5	74.9	17.1	4.2	
60 ~ 64	2 519 317	60 070	1 599 365	761 594	87 480	2.4	63.5	30.2	3.5	
65 歳 以上	6 147 648	79 887	2 178 351	3 695 807	138 379	1.3	35.4	60.1	2.3	
昭 和 60 年	1985									
女	48 843 175	10 585 589	30 546 902	6 182 254	1 466 440	21.7	62.5	12.7	3.0	
15 ~ 19 歳	4 379 520	4 329 592	37 465	67	693	98.9	0.9	0.0	0.0	
20 ~ 24	4 034 559	3 284 041	723 672	1 156	16 387	81.4	17.9	0.0	0.4	
25 ~ 29	3 875 072	1 185 628	2 621 907	4 599	58 085	30.6	67.7	0.1	1.5	

30 ~ 34	4 495 959	468 647	3 871 475	17 386	135 351	10.4	86.1	0.4	3.0
35 ~ 39	5 339 814	354 259	4 713 636	48 613	220 493	6.6	88.3	0.9	4.1
40 ~ 44	4 583 077	224 398	4 049 157	97 636	209 650	4.9	88.4	2.1	4.6
45 ~ 49	4 144 493	177 178	3 601 744	177 863	185 485	4.3	86.9	4.3	4.5
50 ~ 54	4 006 580	174 304	3 351 423	306 455	171 536	4.4	83.6	7.6	4.3
55 ~ 59	3 590 371	157 120	2 805 043	468 795	156 301	4.4	78.1	13.1	4.4
60 ~ 64	3 025 636	106 280	2 076 602	713 048	126 264	3.5	68.6	23.6	4.2
65 歳以上	7 368 094	124 142	2 694 778	4 346 636	186 195	1.7	36.6	59.0	2.5
平成 2 年 1990									
15 ~ 19 歳	4 884 872	4 795 705	35 493	55	635	98.2	0.7	0.0	0.0
20 ~ 24	4 331 922	3 682 263	583 349	1 364	17 207	85.0	13.5	0.0	0.4
25 ~ 29	3 992 244	1 604 279	2 295 605	4 234	64 318	40.2	57.5	0.1	1.6
30 ~ 34	3 862 332	535 038	3 193 773	11 654	111 013	13.9	82.7	0.3	2.9
35 ~ 39	4 478 951	336 200	3 910 560	33 340	188 412	7.5	87.3	0.7	4.2
40 ~ 44	5 308 305	305 934	4 625 552	83 548	277 966	5.8	87.1	1.6	5.2
45 ~ 49	4 535 714	207 203	3 918 562	152 577	241 289	4.6	86.4	3.4	5.3
50 ~ 54	4 091 138	166 048	3 446 517	264 114	197 351	4.1	84.2	6.5	4.8
55 ~ 59	3 941 521	164 585	3 151 070	436 744	169 466	4.2	79.9	11.1	4.3
60 ~ 64	3 508 465	148 235	2 559 520	634 749	146 166	4.2	73.0	18.1	4.2
65 歳以上	8 906 958	204 089	3 569 894	4 773 326	263 619	2.3	40.1	53.6	3.0
平成 7 年 1995									
15 ~ 19 歳	4 172 183	4 124 285	27 105	82	879	98.9	0.6	0.0	0.0
20 ~ 24	4 853 773	4 192 092	610 511	991	24 586	86.4	12.6	0.0	0.5
25 ~ 29	4 336 016	2 082 439	2 151 902	3 776	79 645	48.0	49.6	0.1	1.8
30 ~ 34	4 012 606	789 679	3 063 708	10 410	136 900	19.7	76.4	0.3	3.4
35 ~ 39	3 876 412	389 150	3 283 532	23 600	170 788	10.0	84.7	0.6	4.4
40 ~ 44	4 478 720	302 055	3 854 628	60 330	250 313	6.7	86.1	1.3	5.6
45 ~ 49	5 290 031	297 368	4 499 156	139 355	337 387	5.6	85.0	2.6	6.4
50 ~ 54	4 500 131	204 359	3 769 475	240 249	269 090	4.5	83.8	5.3	6.0
55 ~ 59	4 046 859	165 572	3 260 008	397 379	206 281	4.1	80.6	9.8	5.1
60 ~ 64	3 863 161	159 584	2 884 301	633 025	166 980	4.1	74.7	16.4	4.3
65 歳以上	10 756 569	321 441	4 634 464	5 391 760	344 639	3.0	43.1	50.1	3.2

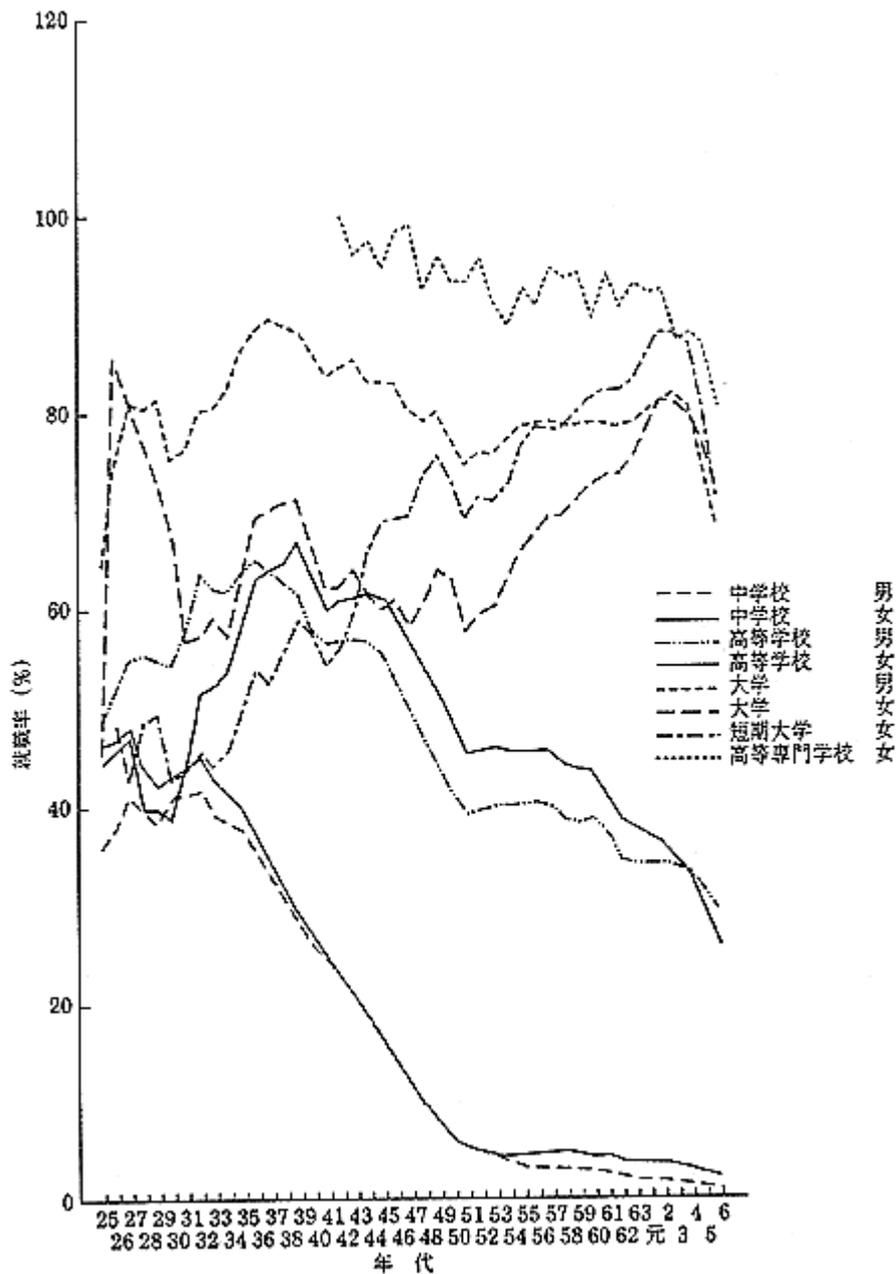
### 学校種別進学率の推移



大学（学部）・短期大学（本科）進学率...浪人を含む。大学学部・短期大学本科入学者数（浪人も含む。）を3年前の中学校卒業生数で除した比率。

資料出所：文部省「学校基本調査」

学歴別・就職率



注：各年3月卒業者のうち、就職者（就職進学者を含む。）の占める割合である。

資料出所：文部省「学校基本調査」

( 終り )



ステップ

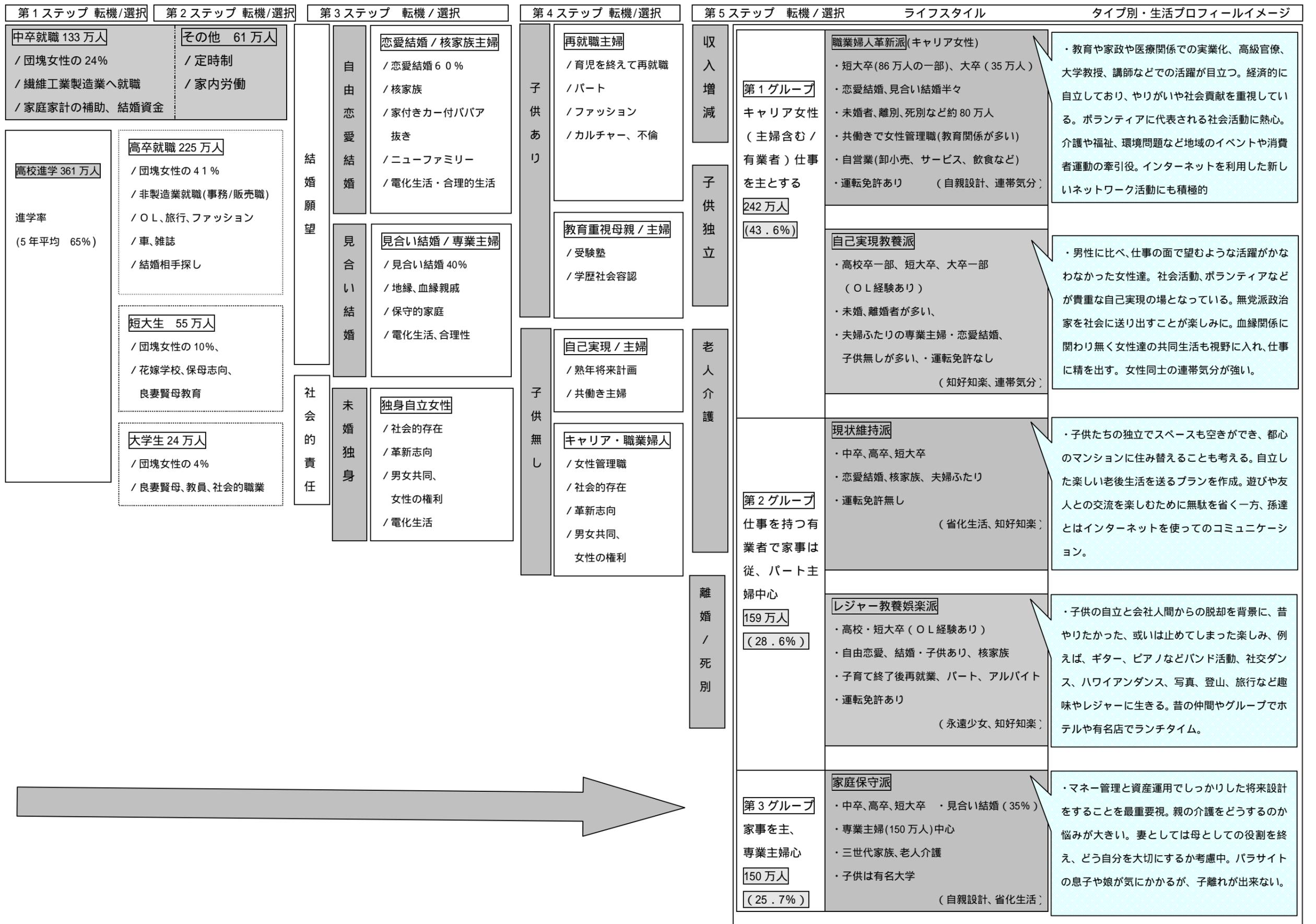
24歳の機会と選択/結婚適齢期 見合い結婚、恋愛結婚か、未婚か		
昭和46年(1971)～昭和50年(1975)		トレンド
自由恋愛 / 結婚 / 核家族	60%	/ 高校、短大卒業後、都会での生活。5,6年後働いて、遊びもファッションもほどほどに / 結婚資金も蓄え、生花、料理教室など花嫁修業もほどほどに / 職場で知り合った男性との自由恋愛 / 24.5歳で結婚、夫は3歳年上、理想的な結婚、子供は『女兒』より『男児』を希望
見合い/ 結婚 / 大家族・三世 代世帯	30%	/ 都会ならともかく地方ではまだまだ見合い結婚が主流 / 親戚や上司の紹介での見合いで、安心した結婚生活が望める / 結婚は、恋愛よりも、家庭や親戚を守るためのもの。子育ても家のため / 男の子を産んで『家』を守ってゆくことこそ主婦
未婚	10%	/ 年齢別人口昭和50年、25～29歳女性の女性の未婚者数は約112万人。昭和55年(30～35歳)は49万人。

ステップ

50歳の機会と選択/家庭からの解放 仕事で自立か、家庭介護か、専業主婦に止まるか		
平成10年(1998)～現在		トレンド
兼業主婦	有業者 73% (主婦以外含む)	/ 夫は、近いうち定年(55歳)、リストラ対象 / 子供は結婚前後、一部には孫も誕生 / 離婚の危機(経済的自立/実際は困難) / パート・アルバイト35% / 正規職員37% / 精神的に充実した生活志向
主婦専業	無業者 27%	/ 夫が上級管理職、大企業勤務、年金保証 / 将来計画がほぼ安定/大卒・短大卒女性 / 豊かな老後生活を楽しむ志向
働く女性・婦人	約30万人 (推定)	/ 社会的地位の確立/大卒女性 / 未婚者約30万人(団塊女性の約6%)

ステップ

35歳の機会と選択/出産・子育て/教育期 子供の有無、自由時間の利用、教育、再就業か		
昭和57年(1982)～昭和61年(1986)		トレンド
教育派 母親	主婦の 約30%	/ 団塊の世代達の第一子が出生(昭和47年～49年)してから10年、幼児から小中学生に成長 / 昭和42年に導入した学校群制度が、受験生を私立に向かわせ、母親が、子供の受験に熱を上げ、中学生の通塾率は35%、小学4～6年生は22%(昭和57年)に
主婦一般 家庭 パート 主婦	主婦の 約50%	/ O.L時代から、主婦が働くことをよとしてきた世代 / 乳幼児の育児がネックとなって就業できなかったが、子供の手が離れたことを期に、仕事をする主婦が増加 / 経済成長も下火になり、自分が働いて稼いだ金を『ファッション』など自分の楽しみに消費 / 主婦がパートをする比率は5割に(昭和63年)
子供なし の主婦/ 主婦	主婦の 約10%	/ 子供のいない主婦は、働く婦人としてかなりの仕事をこなし、管理的な仕事をする人も多くなっている / しかし、多くの婦人は、男女機会均等法ができる前なので、基本的には苦しい立場にあった
未婚、離婚者	約10%	/ 昭和60年(35～39歳)当時、約10% 未婚者数35万人、離別者22万人 / 管理的な仕事をする人も多くなっている



ライフスタイルの項、( )内は、『団塊家族コンセプト200』(株)読売広告社、(財)ハイライフ